

SAN-EN-NANSHIN



第17回

三遠南信サミット2009

in 東三河

事業報告書

テーマ

日本の県境連携モデルの構築

～三遠南信地域連携ビジョンの実現に向けて～

第17回 三遠南信サミット 2009 in 東三河

日本の県境連携モデルの構築 ～三遠南信地域連携ビジョンの実現に向けて～

- 日 時 平成21年11月13日（金）
- 会 場 ホテル日航豊橋（豊橋市藤沢町）
- 主 催 三遠南信地域連携ビジョン推進会議（SENA）
- 共 催 三遠南信地域交流ネットワーク会議
三遠南信地域経済開発協議会
三遠南信地域整備連絡会議
- 後 援 国土交通省、経済産業省、農林水産省、愛知県、長野県、静岡県
- 参加者 550名
- 日 程

1 全体会（13:00～15:00）

- あいさつ（13:00～13:30）
 - ・ 主催者あいさつ
三遠南信地域連携ビジョン推進会議会長 浜松市長 鈴木康友
 - ・ 開催地域代表あいさつ
三遠南信地域連携ビジョン推進会議副会長 豊橋市長 佐原光一
三遠南信地域連携ビジョン推進会議副会長 豊橋商工会議所会頭 磯村直英
 - ・ 来賓祝辞
国土交通省中部地方整備局長 富田英治 様
経済産業省中部経済産業局長 宮川 正 様
愛知県副知事 西村 眞 様
- 基調講演（13:30～14:30）
「変動と変化への地域的対応」 / 中央大学経済学部教授 山崎 朗 様

- 事業報告 (14:30～15:00)
 - ・ 「県境を跨ぐエコ地域づくり戦略プランについて」
豊橋技術科学大学建設工学系教授・地域協働まちづくりリサーチセンター長
大貝 彰 様
 - ・ 「農商工連携について」
株式会社サイエンスクリエイト代表取締役専務 中野和久 様
- ※ 終了後 休憩 30分

2 分科会 (15:30～17:30)

- 「道」分科会 「地域基盤形成による人・もの・情報の流動促進」
コーディネーター 豊橋市長 佐原光一
アドバイザー 豊橋技術科学大学建設工学系教授・地域協働まちづくりリサーチ
センター長 大貝 彰 様
 - 「技」分科会 「県境域の持続的発展に向けた産学官連携・農商工連携への期待」
コーディネーター 愛知大学三遠南信地域連携センター長 岩崎正弥 様
アドバイザー 株式会社サイエンスクリエイト代表取締役専務 中野和久 様
 - 「風土」分科会 「塩の道に培われた歴史・文化資源を活かすネットワークづくり」
コーディネーター 市民団体連携委員会委員長 原田敏之 様
アドバイザー 野外教育研究財団理事長 羽場睦美 様
 - 「山・住」合同分科会 「広域連携による生活環境の向上と流域定住の促進」
コーディネーター 社団法人東三河地域研究センター常務理事 戸田敏行 様
アドバイザー 静岡文化芸術大学副学長・教授 上野征洋 様
- ※ 終了後 休憩 30分

3 報告会 (18:00～18:30)

- ・ サミット宣言
豊橋市長 佐原光一
- ・ 次回開催地域代表あいさつ
飯田市長 牧野光朗

4 交流会 (18:30～20:00)

5 その他

- ・ 三遠南信地域住民セッション (10:00～12:00)

目 次

1	全体会 主催者等あいさつ・来賓祝辞	1
2	全体会 基調講演 要旨	7
3	全体会 事業報告 要旨	10
4	「道」分科会 要旨	15
5	「技」分科会 要旨	23
6	「風土」分科会 要旨	30
7	「山・住」合同分科会 要旨	36
8	三遠南信地域住民セッション 要旨	44
9	報告会 要旨	47
10	交流会	53



○ 主催者あいさつ

■ 三遠南信地域連携ビジョン推進会議会長 浜松市長 鈴木康友



皆様、こんにちは。ご紹介を賜りました、浜松市長の鈴木康友でございます。本日は、第17回となりました「三遠南信サミット in 東三河」に、本当に多数の関係者の皆様にご列席をいただきまして、本当にありがとうございます。そして、豊橋市長の佐原市長を始め、この会議の開催に当たりまして豊橋市並びに関係者の皆様に大変お世話になりましたこと、高い席からではありますが、心から厚く御礼を申し上げたいと思います。

今回、回を重ねて17回目となる、この三遠南信サミットでございますが、前回と大きく異なるのは、いよいよSENA、三遠南信地域連携ビジョン推進会議ができて、このSENAがいよいよ動き出すということでございます。今回のテーマは、日本の県境連携のモデルとしていこうということで、三遠南信地域連携ビジョンの実現に向けて、これから全体会、あるいは分科会でご議論をしていただくこととなります。SENAが運営をする初めてのサミットになりまして、これまで交流を中心に行っていました、この三遠南信のいろいろな連携が、いよいよ具体的なビジョンの推進という形に変わってくるということになります。

この4月からは、豊橋市さん、それから飯田市さんからも、浜松市の方に職員の方にお越し

をいただきまして、今、この事務局が設置をされているいろいろなことが動き出しているということございまして、いよいよこの三遠南信連携がスタートしたなという感を強くしております。

そしてまた、この三遠南信連携ビジョンにつきましては、今、国の方で将来の道州制の一つのたたき台となる広域地方計画が各地でつくられているのですが、この中部圏の広域地方計画、この中に三遠南信連携の取り組みがリーディングプロジェクトとしてきちんと位置づけられたということでございます。それだけ、この県境を越えた地域連携が、今、国においても大きく注目をされているということございまして、今、地域主権国家に向けた動きが加速する中で、ある意味で日本をリードする、この地域の連携の取り組みではないかなと思う次第でございます。そういう意味で、我々も自信を持ってこの連携をこれからもしっかりと進めていきたいと思う次第でございます。

本日は、こうしたことを踏まえまして、全体会、あるいは分科会におきまして、今後取り組む重要事項につきまして、関係の皆様からいろいろご意見、ご提言をいただくということになっております。是非活発なご議論を期待するところでございます。

そして、中央大学の山崎朗先生にお越しをいただきまして、今後の分権時代の地域の取り組みについてご講演をいただくことになっております。先生のご示唆もいただきながら、我々の今後の連携に是非活かしていきたいと思っております。

結びに当たりまして、この三遠南信連携が、このサミットを通じていよいよ具体的に、大いに飛躍をしていく、そういうサミットになりますことを期待いたしますとともに、今日ご列席の皆様のご健勝とご活躍を心からご祈念を申し上げまして、冒頭に当たりましてごあいさつにかえさせていただきます。本日は誠にありがとうございます。よろしく申し上げます。

○ 開催地域代表あいさつ

■ 三遠南信地域連携ビジョン推進会議副会長
豊橋市長 佐原光一



皆様、改めましてこんにちは。豊橋市長の佐原でございます。本日はご多忙中にもかかわらず、大変多くの方々、関係者の皆様方にこの東三河、豊橋の地にお集まりいただきました。開催地を代表いたしまして、ようこそ豊橋へということで御礼を申し上げたく存じます。また、平素から三遠南信地域の振興、発展に格段のご協力をいただいておりますご来賓の皆様方におかれましては、本日お忙しい中ご臨席をいただきまして、誠にありがとうございます。

先ほどお話がありましたように、平成5年度に始まりましたこの三遠南信サミットが、今回で17回目ということでございます。東三河、この地域では6回目の開催になります。また、お話がありましたように、今回から三遠南信地域連携ビジョン推進会議、SENAが主催する初めてのサミットになります。そういった新しい形でのサミットをこの豊橋の地から始めることができるということは、私どもとしては大変光栄なことで存じております。開催に当たっての、皆様方のおもてなし、お迎えする立場で、この東三河の地域の持つております伝統的なおもてなしの心で、是非皆様方に今回のサミットをご堪能いただけるようにサポートをしっかりさせていただきたいと、このように思っております。

さて、この三遠南信地域、この地域は日本のいろいろな意味での生産、経済活動の中心であろうと思っております。人口でいってもちょう

ど日本の真ん中に当たるわけですが、そんな地域で大変活発な、さまざまな種類の工業が行われております。そして、農業の生産に至っては、本当に近代的な農業の集積地でございます。また、これらのものを運びます高速道路網、そして鉄道網、いろいろなものがございますが、とりわけ海外に向けては三河港があり、東側に行きますと御前崎港があり、そしてこのたび供用の始まりました富士山静岡空港があるということでございます。

今、私たちが大きなテーマとしております三遠南信自動車道、そして浜松三ヶ日・豊橋道路、これの縦の柱、背骨がしっかりできることによりまして、これまでに既に供用を始めております各種の産業基盤、生活基盤、社会基盤がますます活かされることになると思います。そして、この三遠南信地域には、古くから培った伝統ある文化、そして皆様方が持つております自然豊かなそれぞれの地域の特徴、こんなものを三遠南信の場で、みんなで紡ぎ合わせ、力を携えて一つの力にしていきたいと思っております。是非、このサミットの場所がビジョンを推進する中でそういったことをしっかり考え、行動に移す、そしてなし遂げていく、そんな場所になることを期待してやみません。

また、本日、関係しますたくさんの方の市町村の議員の方がお集まりでございますが、この豊橋の地で三遠南信正副議長協議会が今年度も行われております。そうしたことで、議員の方たちも大変多数の方にご参加をいただいております。第2回三遠南信、浜松三ヶ日・豊橋道路建設促進議員協議会の総会が先ほどまで行われておりました。今お話をいたしました、この三遠南信を貫く背骨のことを、議会の立場からも応援していただき、本当にうれしく思っております。

そして、10月には同じくこの豊橋の地で第2回の三遠南信しんきんサミットが開催されております。こちらの方では、経済の立場で三遠南信のことをお考えいただいたと思っております。

最後になりますが、今日のサミットの場所で、よく考えてよく行動する、そして成果を上げて

いくための活発な議論がされまして、この三遠南信サミット、みんなが参加してよかったな、いい勉強になったな、これから頑張っていこう、そんなことを心に誓い合えるようになれることをご祈念申し上げまして、そしてご参加の皆様方のご健勝、ご発展を祈念申し上げまして、開催地の代表としてのごあいさつとさせていただきます。本日は、皆様、どうぞよろしくお願いいいたします。

■三遠南信地域連携ビジョン推進会議副会長
豊橋商工会議所会頭 磯村直英



皆様、こんにちは。第17回の三遠南信サミットがこのように盛大に開催されますことを大変うれしく思うとともに、行政の皆様、そして議会の関係の皆様、市民団体の皆様、そして商工会議所、商工会の皆様、遠来よりもお忙しい中ご出席を賜りまして、開催地域の会頭として心より歓迎を申し上げたいと思っております。また、平素は三遠南信地域の振興に格別のご高配をいただいておりますご来賓の皆様にも、お忙しい中ご臨席を賜りまして、誠にありがとうございます。

商工会議所、商工会を取り巻く環境は、大変変化をいたしております。低迷を続けます景気、そして、少子高齢化の到来、グローバル化、情報化、地球温暖化の問題、そしてニーズの多様化など本当に大きな環境の変化を迎えております。経済団体といたしましては、中小企業のさらなる支援強化、そして地域の活性化にさらにまい進することが求められていると考えているところでございます。今後ともそういった努力

を続けていきたいと考えているところでございます。

三遠南信地域のことにつきましては、ただいま会長であります浜松市長さん、そして豊橋市長さんからもお話がございました。交流から連携、そうした、実際に活動を始める時代に入っ
てまいりました。地域連携ビジョンを着実に推進していくことが一番重要だと考えております。

私ども商工会議所・商工会からなる地域経済開発協議会の役員会を午前中に開催いたしまして、次年度、初めて連携事業といたしまして、街道浪漫クイズラリーを実施することになりました。初めての試みでございますが、その節は皆様に絶大なご支援、ご協力をしていただきまして、成功裏に結びつけたいと思っております。

私ども経済界といたしましては、三遠南信道路の早期完成を求める運動を始めといたしまして、新産業創出や販路開拓、またグローバル化への対応など、広域的な視点に立ち連携協力していきたいと考えているところでございます。

本日は、この全体会、そして分科会と進んでまいりますが、当地域にとって大変意義のある、またご参会の皆様にとりましても実りのあるものになることを期待いたしまして、あいさつとさせていただきます。ありがとうございました。

○ 来賓祝辞

■ 国土交通省中部地方整備局長

富田英治 様



皆様おめでとうございます。ご紹介いただきました中部地方整備局長の富田でございます。今日は、第17回三遠南信サミット2009in 東三河が、新しい枠組みの中でこのように盛大に開催されましたことを、心よりお慶びを申し上げます。また、こういった場にお招きいただきまして誠にありがとうございます。

ご来場の皆様方には、国土交通省関係の行政、特に中部地方整備局が実施しておりますいろいろな施策あるいは事業に、平素より大変深いご理解とご協力、ご支援をいただいておりますこと、この場をお借りいたしまして御礼を申し上げたいと存じます。

この3つの県にまたがる三遠南信地域、豊橋市長のお話にもございましたように、大変大きなポテンシャルを有した地域であるわけでございます。人口にして230万人、そして工業出荷額も13兆円という非常に大きなポテンシャルを秘めた地域でございます。また、もちろん歴史的にも、塩の道を通じた人・もの・情報の交流がされていた地域でございまして、この地域の中での大きな動脈となっておりますのが国道の150号、151号であるわけですが、ご存じのように、この中央構造帯に位置して大変険しい山の中を通っている道なものですから、自動車が通れないとか、あるいは行き違い通行ができないという、いわゆる未整備区間も大分ございまして、これがその地域内の連携交流に大変大

きなネックになっている状況があったわけでございます。

そういったことから、私ども国土交通省といたしましては、延長100キロメートルにわたる三遠南信自動車道を計画いたしましたわけございまして、緊急性の高い区間から順次整備を進めている状況でございます。

昨年の4月に、飯田山本インターから天竜峡インター約7キロメートルほどでございますが、供用を開始させていただいております。また、三遠道路、佐久間道路については、今、鋭意整備を進めていると、こういう状況でございます。

また、青崩峠道路でございますが、これは今、環境影響評価の進捗を進めてきておりまして、今年の6月でございますが、評価書を公告するということところで、一応一つの段階がここで終わったと、こういう状況になっているわけでございます。

こういったことで、この三遠南信道路も整備が着々と進んできているわけでございますが、肝心なのは、こういう道路も十分に活用していただきながら、この地域がどういう形で活性化していくかということであるわけございまして、先ほどお話ございましたように、昨年の3月にこのサミットで策定をしていただきました「三遠南信地域連携ビジョン」、この実施に向けて各種、大変意欲的な取り組みをしていただいていると存じ上げております。

また、それに加えまして、先ほど鈴木市長からもご紹介ございましたが、この中部圏の広域地方計画、ちょうど今年の8月に策定がされたものでございますが、この中でも全部で14のリーディングプロジェクトが決まっております、その非常に重要なプロジェクトとして「三遠南信流域都市圏活力向上プロジェクト」が位置づけられている状況でございます。

こういったことで、基盤の整備を進めながら地域の活性化を連携を図りながら進めていく、まさにそういう実施の段階に入ってきたという実感がするわけでございます。

また、各地域でもそれぞれ、これと連携して

意欲的な活性化の取り組みを進めていただいているわけでごさいます、例えば豊橋市さんの場合でごさいますと、三河港を活用した「国際自動車コンプレックス計画」をつくられて、非常に意欲的な取り組みをされている。また、飯田市さんにおかれましては、「環境モデル都市」の認定を受けられまして、地球温暖化ガスの削減をキーワードとした各種取り組みをされている。そして、浜松市さんの方では「モザイカルチャー世界博 2009」、これが開催され、大変な賑わいをしておられる状況でごさいます。

こういった取り組みが一体となって、この地域がますます交流を活発化し、また発展されていくことを心よりお祈り申し上げるとともに、本日ご参集の皆様方のますますのご健勝をお祈りして、お祝いの言葉とさせていただきますと存じます。今日は本当におめでとうございます。

■ 経済産業省中部経済産業局長

宮川 正 様



ただいまご紹介賜りました、中部経済産業局長の宮川でごさいます。まず、冒頭ではごさいます、先の台風 18 号では、この三遠南信地域において大きな被害が発生されたと伺っております。心よりお見舞い申し上げたいと存じます。さて、本日この第 17 回三遠南信サミット 2009 in 東三河が、かくも盛大に開催されましたことに対しまして、心よりお喜び申し上げたいと存じます。

先ほど来、皆様からご紹介ありましたように、この地域が人口で 230 万人、また、産業規模でも 1 県に匹敵するような、こういう規模を持っ

ておられると聞いております。さらに、多様な自然環境、特色ある歴史、文化を有するポテンシャルの高い地域だと伺っております。

昨年 3 月にはビジョンを策定されまして、また本日、このビジョンを実現する、それを目指しまして県境連携モデルの構築と、これをテーマとする本サミットがこの地域で開催されるということは、誠に有意義ではないかと思っております。是非実りある成果を収められますことを期待したいと思います。

ご承知のとおり、中部管内の経済状況でごさいます、確かに数字自体は少しずつよくなっているということでごさいます、残念ながら、こういった経済の実感というものがまだ雇用の面、そして中小企業の方々のビジネスの面では出てきていないと、こういうことで、厳しい状況が続いているのではないかと思っております。私ども中部経済局といたしましても、雇用対策、そして年末にかけた資金繰り対策に万全を期してまいりたいと、かように考えているところでごさいます。

さて、当地域は、自動車、航空機産業、こういうことでごさいます、既に実際のビジネスは車体、機体メーカーと部品メーカーとの間では県境を越えた形でどんどんビジネスが進んでいるわけでごさいます。そういう意味では、有機的な連携が既に経済のビジネスの中では進んでいるということが言えようかと思えます。当局といたしましても、自動車関連では、最近ご承知のとおりエコカーということでごさいます、電気自動車、ハイブリッド、プラグインハイブリッドと新しい自動車も出てきております。こういうことをにらみまして、部品周りの新しい有望技術分野を明示させていただきたいということでごさいます、勉強会を開始いたしました。是非こういった有望な技術周りの分野を明示させていただきまして、政策パッケージをつくってまいりたいと、かように考えております。また、航空機産業におきましても、来年夏に開催をされます英国の航空ショーで当局分のブースを確保いたしまして、当地域を含めまし

て中部地域の部品産業の方々の出展を支援してまいりたいと、かように考えております。

また、今日もセミナーでご講演があらうかと思いますが、農商工連携でございます。この事業におきましては、従来、商品開発の積極支援をやってまいりましたが、さらに今後は販路開拓ということで、この部分については是非積極的に展開をしてみたいと、かように考えております。本サミットのご参加の皆様方におかれましても、引き続きご支援、ご協力を賜りますよう、よろしくお祈りしたいと存じます。

最後になりましたが、三遠南信サミットのさらなるご発展と、また、今日ここにご出席の皆様方のご健勝、ご発展を祈念し、ごあいさつにかえさせていただきます。本日は本当におめでとうございました。

■愛知県副知事 西村 眞 様



皆様、こんにちは。神田知事がまいりましてごあいさつを申し上げるところでございますが、所用がございまして出席がかないませんでした。私、副知事の西村でございますが、私から一言ごあいさつをさせていただきます。第17回の三遠南信サミットがこのように盛大に開催されますことを、心からお喜びを申し上げます。

三遠南信地域は、古くから天竜川や豊川を介した水運を利用して、木材や海産物などが行き来し、これに伴って人の交流も盛んであったところであり、近年も地域の活性化を目指し、産業、文化、観光などの多様な交流・連携活動が展開され、県境を越えた地域連携という点から大きく注目をされているところでございます。

本年8月に策定をされました「中部圏広域地方計画」では、中部圏のリーディングプロジェクトの一つとして「三遠南信流域都市活力向上プロジェクト」が位置づけられており、産学官民が一体となって、このサミットで合意した「三遠南信地域連携ビジョン」の実現に向けて、地域資源を有効に活用するとともに、県境を越えた地域間の交流、連携に取り組むことが謳われております。地域住民、大学、経済界、行政の方々が一堂に会し、県境を越えた地域連携を推進し、一体的な圏域発展の方策を模索することを目的としました当サミットは、まさにこのプロジェクトの推進に向け、大変有意義なものであり、その成果が期待をされております。

ところで、当地域の広域連携を支える上で最大の機軸となりますのが三遠南信自動車道であり、本年度より測量設計が進められております青崩峠道路やトンネル、橋梁などの工事が鋭意進められております三遠道路など、長野、静岡、愛知の各県内において着々と事業進捗が図られておりますことに深く感謝を申し上げる次第であります。新政権におきましては、公共事業の削減・見直しが行われておりますが、この道路は三遠南信地域発展の礎として、また地域の人々の暮らしを支える命の道として欠くことのできないものであり、今後も一層の整備促進を期待する次第であります。

最後になりましたが、本日の三遠南信サミットが実りある成果を収められますことと、本日もご出席の皆様方のご健勝を祈念いたしましてお祝いの言葉とさせていただきます。本日はおめでとうございました。

■ 変動と変化への地域的対応



中央大学経済学部教授
山崎 朗 様

要職

国土審議会政策部会委員、産業構造審議会新成長政策部会委員、地域科学技術施策検討委員会委員 他

今日は、新横浜駅からひかり号で来たが、新横浜駅の次が豊橋ということで、1時間で着いた。豊橋で降りる方が大変多くて、意外にこの地域と首都圏のビジネスが関連しているのだなと驚いたところである。交通というのは非常に重要である。リニアについては、ルートの問題が注目されているが、開通するとこのエリアと神奈川県あるいは東京の西部が隣町になるということも重要である。非常に広域的な連携を可能とする、非常におもしろい、新しい地域連携ができるようになる。

私が住んでいる町田、相模原、八王子あたりは交通アクセスの悪いエリアで、新宿までは30分で行けるが、羽田空港までは、1時間半から2時間半ぐらい、成田空港までは確実に3時間以上は時間を見ておかないといけない。人口は、相模原、町田、八王子、多摩エリアの一部のエリアを入れるだけで、恐らく400万人である。400万人といえば、名古屋市以上であり、新幹線や旧帝国大学がないことはあり得ない。しかし、小さい、50万人ぐらいの町がばらばらとあるおかげで、相互に連携することなく力が発揮できないでいる。高知と愛媛の県境地域に、四万十川のある四万十市があるが、高知空港から3時間半ぐらいかかる。高速を使って3時間半走ってどこの空港にも着かないところは、実は

日本中そう多くはない。その四万十市で、市長さんと話をしたところ、松山空港からは2時間であり、愛媛県側ともっとつながりたい、非常に険しくすれ違いのできないような県境の道路を整備してほしいとのことであった。一方、高知県としてみれば、四万十川というのは高知県の大変に重要な観光地であり、お客さんを何とかして高知空港から行かせたいという思惑がある。四万十川の観光のポテンシャルが、県の思惑によって活かされていない気がする。

熊本と大分の県境も、阿蘇や高千穂などの観光地があるが、1つのルートでは回りにくい。また、県境をはさんで一方では商業高校がなくなり困っているが、片方では商業高校が残っている。しかし通学できないという状況がある。県境地域というのは一番の過疎地域で、境界があるということで様々な制約を受けている。しかし、今は県中心の枠組みになっており、非常に解決が難しい状況である。

実は4、5年前に、三河港の東京ポートセールスについて基調講演をさせていただいたことがある。佐賀県の伊万里港と比較させていただいたが、当時わずか人口5万人の町にある伊万里港が三河港の2倍近いコンテナ貨物量があった。三河港の実力からすればこんな貨物量で済むわけがないということでエールを送らせていただ

いた。あつという間に貨物は伸びているようで、御前崎の方も想像を超える勢いで貨物量が増えているようである。やはりもともとこの地域は非常にポテンシャルのある地域だと思う。

私の出身の佐賀県の唐津市は、JRと地下鉄が相互乗り入れで福岡空港まで一本で行くことができ、買い物、通勤、通学もほとんど福岡の方に行く。佐賀県は、佐賀市を中心とする半径30キロメートル、人口150万人を圏域とする、佐賀大都市圏構想という構想を打ち出したが、都市としての吸引力がなく、うまくいかなかった。このエリアには、やはり浜松と豊橋という二つのツインシティ、吸引力のある大きな2大都市があり、このエリアを一つの圏域としてまとめ上げる力になっているということは間違いない。社会が大きく変わりつつある中で、それに対応していかざるを得ない。それは個人、企業、産業、地域も逃れられない。モビリティの高度化、情報のデジタル化、インターネットの活用については、皆さん15年前、20年前に今の状態になるとは考えてなかったのではないか。これから先、さらに我々は変化に適応していかなければならない。

現在、京浜港物流高度化推進会議の委員をしている。京浜港というのは東京港、川崎港、横浜港のことで、県境を越えている。私はこれに千葉港や船橋を加えて東京湾港とすべきだと思う。そしてその中で、合理的な投資をしたり、役割分担をする時代が来たのではないかと思う。今、貨物の取り合いなど市や都の戦いの中で、地域や企業のためとなる港湾整備が妨げられている。

社会実験を4、5年前から始めた。横浜港で降ろした東京方面の貨物、東京港で降ろした横浜方面の貨物を、道路や内航船ではなくて、港の間で小さなはしけにより移動させることによって、交通渋滞を防ぎつつコストを下げるというものである。この取り組みを対岸の千葉県側にまで拡張しようすると、京浜港には千葉県は含まれないということで、当初はうまくいかな

かった。

東京港では、コンテナ埠頭に大水深を新たに作るための埋め立てを行ったが、その際千葉県県の県境より先が埋め立てできずコンテナターミナルの形がいびつになった。また、成田空港と羽田空港の話も聞いていても、国内線と国際線を切り離すことで世界の中での東京の魅力をどんどん衰退させている。全体として利便性の高い社会資本のあり方は何なのかということの本気で考える時代になった。

45フィートコンテナについては、5、6年前から港湾の専門家が、香港やシンガポールにおける45フィートコンテナの急増に鑑み、日本の港湾や付随する道路の整備を提言していたが、当時は関係者には理解してもらえなかった。ところが昨年になって45フィートコンテナが出てきて、大変なことになると慌てている状況である。

今日は川の話があったが、天竜川と豊川をもう一度使ってみるのはどうか。私は、京浜港物流高度化推進協議会で川を利用した物流を提言している。荒川沿いのホンダの狭山工場やその周辺の部品工場にアンケートをしてみても、川を利用した物流に賛同する会社が非常に多かった。

空港については、新幹線が走るルート上に国際空港がほとんどない状況である。日本という国は長期的な将来のことを考えないまま国土形成計画をやってきた。全体の計画がないままに来ており、手直するのが本当に難しくなってしまったと思う。

製造業の雇用者比率はこれからも低下していく。農業を活性化しても雇用は生まれない。1次産業で働く人はヨーロッパでは1%切っている。それだけ生産性が高いということである。日本も生産性を高めて国際競争力を上げないといけない。現在基本的には、第3次産業しか伸びないため、都市機能がないところでは非常に厳しい状況である。

韓国もいずれ大変な人口減少になる。20年ぐ

らい先だが、中国も人口減少に入っていて、超高齢化する。地域づくりで一番大事なことは、やはり本当に子供を産み育てやすい地域づくりをもう一度真剣に考えるということである。子供たちが生まれ育っていく良い環境を、我々はつくれなかったところがある。人口が急増したから仕方がないが、あわててやっつけ仕事で、公団住宅をバタバタ建ててしまった。ドイツでは公団住宅を3分の1ぐらいにし、それにより広場ができて子供たちもゆっくりと遊ぶことができるようになった。そういうまちづくりを是非しなければならぬ。

2050年のイメージは、国土の3割ぐらいに国民の9割ぐらいが住み、残りの7割ぐらいには国民の10%ぐらいしか住まないという非常にアンバランスな状態になる。恐らくこの地域においても、中山間地域と人口の多い都市圏とを比較すると、すごい状況である。国土の10%ぐらいに国民の8割近くが住んで、国土面積の6割ぐらいに国民の数パーセントしか住んでいないという実体になる。人口分布が乖離して、全く同じ生活を維持していくことは大変難しい。国民は必ず小学校、中学校への通学もできなくなってくる。インターネットを利用した教育が必要となってくる。

都市圏というものは、中心都市が10万人ぐらいで、周辺に30万人ぐらいいないと、買い物、医療、福祉ができない。できるだけこういった都市圏が国土上に分散していることが国民の福祉にとって極めて重要である。しかし、将来残り得る都市圏は、もうこの段階で82しかない。国土の末端とか県境地域の中山間地域には都市は残らない。この県境地域、それから末端に血液の循環が行かなくなるのが非常によくわかる。

国土形成計画の「国土の均衡ある発展」とは、「地域間格差の是正」とは何かはつきりせず、中身のわからないままみんな賛成していた。大きな病気をした場合、どうするのか。高校に行こうとか、福祉の学校へ行こうと思ったらどこに行くのか。一定規模の都市に行かないと勉強

できない。だから、結局はどこかに行かなければいけない。そうすると、広域的な中で、実は県境を越えて行った方がいいというエリアもいろいろなところで出てくる。必ずしもそのエリアの中で完結するというのではない。

皆さん方はご存じのように、県境地域にさまざまな問題がある。いろいろなプロジェクトの補助金は県に出される。しかし、やはり県ではなくて、それぞれの複数の市や広域的なこの地域が連携して助成金が取れてプロジェクトができるようなものをつくっていく必要がある。

日本という国は東京と大阪にどうつながるかということばかりやっているところなので、これは大都市でも、縦ラインは本当に日本中弱い。地域間格差を是正するというような話もほとんど終焉しており、困っているから助けてほしいということではお金は下りない。

これから先、やはり日本が生きていく道はイノベーションで、大学の知恵を用いながら新しい製品開発していくことが重要である。地域振興の考え方を新しいアイデアに変えていかなければいけない。今まではほおっておいても地域間格差が是正されたが、今は、良いものにしかお金は回らない。

これから先、都市というのが大変重要になり、やはり地域の中にどれだけ都市機能を持っているかということになる。よって、人口を増加させていくことを考えなければならない時代に来たという気がする。

ちょうど時間がきたので、私の話はここまでさせていただきます。ご清聴どうもありがとうございました。



○ 県境を跨ぐエコ地域づくり戦略プランについて

豊橋技術科学大学建設工学系教授・地域協働まちづくりリサーチセンター長

大貝 彰 様



本日は、平成 18 年から愛知大学と本学が中心となって進めている、三遠南信をフィールドとした研究プロジェクトについてご報告をさせていただきます。

■ プロジェクトの概要について

まず始めに、プロジェクトの背景であるが、地域協働のまちづくり、地域貢献そして地域連携、これは本学、そして今全国の大学に求められている一つの重要な柱になっている。そして、大学が法人化された以後、学際的研究の推進が非常に強く言われており、これらがこのプロジェクトの大学側の背景としてある。

そして一方で、地域社会の問題として、国土形成計画の策定が当時進み始めており、また道州制の議論もあった。また、先ほどの山崎先生の話にもあったように、やはり地域がどうやってこれから自立して生きていくのかという課題に答える必要がある。こうしたことを背景に、三遠南信をフィールドにして異分野の研究者、愛知大学の先生方を含めて、公共的団体との連携融合によりこの研究プロジェクトを始めた。

プロジェクトの目的であるが、地域づくり戦略プランというものをまず研究し、一方で、地域づくりにどうしても不可欠な人材育成についても考えていく。こういった研究に取り組むことで、最終的にはこのエコ地域づくり戦略プランを地域社会に対して提言していこうと考えている。その結果、三遠南信地域の地域づくりに貢献できれば、さらには、今回のサミットのテーマでもあるが、県境を跨ぐ地域の一つの地域づくりモデルとして全国に発信していくという目的を持って取り組んでいる。

プロジェクトの全体概要であるが、本学と愛知大学、そして三遠南信の主な基礎自治体、さらに愛知県、静岡県、長野県、国土交通省、これらの各団体が参画をして研究を進めてきた。このプロジェクトを進めるために研究会を組織している。総会、幹事会があって、その下に各研究の部会がある。三遠南信自動車道、浜松三ヶ日・豊橋道路のような広域の幹線道路の整備効果を計測する部会、バイオマス利活用に関する部会、河川海岸の水環境、あるいは土砂管理の問題を考える部会、森林の生態環境を評価する部会、そして、人材育成の部会である。こういったことについて、研究を進めてきた。

■ アウトリーチ活動について

この間のアウトリーチ活動をごく簡単にご紹介する。

第 1 回のシンポジウムでは「中山間地域の維持と活性」というテーマでシンポジウムを行った。第 2 回目の公開シンポジウムでは、「越境連携の意義と展望」ということで、EU、アジア、日本、それぞれの地域における越境連携の取り組みについて議論した。第 3 回目には、特に総務省の方をお招きして「定住自立圏構想」についてご報告をいただき、我々の 3 年間の取り組みについて成果を報告した。

そのほかに活動としては、ヨーロッパのEUの越境連携組織の視察や、そのプロジェクトを調査している。

■ エコ地域づくり研究とは

ここからは、我々が取り組んでいるエコ地域づくり研究とは何かということについて説明する。先ほどの山崎先生の話にもあったように、国土地域計画は、もはや昔の考え方では成り立たないということで、その地域の持続性をいかに担保していくかということが問われている。その持続性を担保するには何が必要なのかということであるが、それは環境問題への対応も可能なマネジメントの手法、地域社会のガバナンス、ここには県境連携によるガバナンスや新たな公によるガバナンスといった問題も含めるが、そして地域経営という視点、さらには、そのような人材を育成する視点。こういったことが持続性担保に求められている。我々のやっていることを一言で言えば「都市と中山間の持続性学」となる。

この都市と中山間の持続性学の全体像を考えてみるとこのようになる。生態環境の問題、河川・海岸の問題、バイオマスの問題、あるいは中山間での持続性、人材育成、移住の問題、こういった問題を総合的にマネジメントしていく必要があるということである。そのときに重要なのは、空間スケールでとらえるということである。生態環境というのは、複数の、かなり広域のレベルで考えないといけない。一方で、河川・海岸というのは基本的には流域圏で考えるべきである。バイオマスというのはさらに小さいスケールで考えるべきである。人材育成とか中山間地域の問題というのはさらに小さなレベルになってくる。そういった意味で、地域のとらえ方というのが非常に多様であり、多層性を持っている。こういったものをとりまとめて、多層、多重の広域連携マネジメントといったものが必要なのではないかと考えている。



■ 県境を跨ぐエコ地域づくり戦略プランの組み立てについて

この県境を跨ぐエコ地域づくり戦略プランをどう組み立てていけばいいのかということを考えてみる。ここで、この戦略プランを立案するに当たっては、国に国家戦略があるように地域にも戦略が必要である。戦略の立案の方法としては、経営工学分野のマネジメント技術の考え方がある。それを応用して、地域経営の観点からその戦略プランを考えてみた。

仮にこの戦略を実践していく主体を「地域づくり戦略推進主体」と名付ける。これは現実には恐らくSENAが該当する話にはなるかと思うが、その推進主体に求められているのは、地域の持続性を担保することである。さらに、推進主体はこれまでの自治体による政策立案機能に加え、大学の研究開発能力を活用することで地域を科学的に分析し、戦略を立案する。つまり、大学を補完的な生産者として、推進主体が連携し戦略プランを策定するということである。これは、プランを策定する上でこういった目標像を設定するということである。

エコ地域とは何かであるが、我々としては「人間の活動と環境の相互作用を適切にマネジメントできる地域」と表現をしている。そうした地域の実現を目指すということである。そうした戦略を今後、具体的に皆さんに提示していきたいと考えている。プランがあっても、それだけでは何の意味もなく、それをいかに実践していくかが重要である。つまり、プランをマネジメントできる主体が重要である。先ほどの「地域づくり戦略推進主体」の中身について、我々

は、現在のSENAの拡大バージョンという形で現在のところ考えている。その中心には、政策決定部門、企画調整部門に加えて、この地域の人材育成や研究開発の部門を取り込んだ形の推進主体が必要である。その周りに大学あるいはシンクタンクのほか、行政、経済団体や市民団体、NPOといった具体的なプロジェクトを実践する部隊がある。このような推進主体が最終的にできることによって、戦略性のあるプランを三遠南信地域の中で実行できるのではないかと考えている。来年、22年の末には何らかの形で皆さんの前にこの成果をご報告していきたいと思っている。以上で、私の事業報告を終わらせていただく。どうもありがとうございました。

○ 農商工連携について

株式会社サイエンスクリエイト

代表取締役専務 中野和久 様



今日の報告は、食農産業クラスター推進協議会の事務局長の立場でお話をしたい。サイエンスクリエイトは、設立して20年になるが、第3セクターとして、豊橋市、愛知県、日本政策投資銀行が主要株主で35%、65%は民間に出資していただいている。この20年間、この地域の産業支援や産学連携支援を中心に、事業活動を行ってきた。

■ 農商工連携の形成の背景について

この地域は、自給自足経済圏を形成できる基盤を持っている。そして、「食」と「農」を経営

資源として新しい事業を立ち上げられる場所である。そうしたものを踏まえてこの地域産業を創造していくという背景がある。

見方を変えると、日本の食農ビジネス全体から地域特性に合った事業ポジション、要するに全体の中でこの地域の事業者がどういうものに取り組んだらいいかということを決めながら運営する。それから、多様な地元企業を連携、サポートしながら体制をつくる。そして、新しい商品、技術及びサービスを次世代が継承できるような地区産業に育成する。そうしたものを創出するということが、この食農産業クラスター推進事業の根幹である。

我々のクラスター事業は、現在20事業が展開され、会員116社の方々と取り組んでいる。

食農クラスター推進事業の全体像であるが、まず、農産物輸出入育成事業である。豊橋、田原で今、果物の輸出をやっている。現在、グレーター・ナゴヤの関連でハノーバーに1人行かせており、地域の企業の売り込みをしている。それから、経営支援事業であるが、これは国の支援事業、あるいは制度を使って行っている。また、農産物加工品開発事業であるが、今日お話す農商工連携はここに当たるわけだが、これは現在5つの事業が動いている。忘れてはならないのは、食農機械開発事業である。豊橋技術科学大学との連携事業が多いが、現在、5つの事業が動いている。例えば、通常2工程である畝立てと肥料散布を機械で同時に行うもので、実際に田原のキャベツ畑で行っている。1台100万円ぐらいの機械だが、農水省の補助によりこのような機械開発事業を行っている。さらに地産地消市場開拓事業であるが、これも1つの事業が動いている。あと販路開拓事業であるが、出てきた商品をどういう形で売っていくかという、一番大変な事業である。その他、教育セミナー事業や情報発信事業があり、現在、全部で27事業あり、約100社が参加している。

企業が会員になったときのステップであるが、まず企業のカウンセリングをしながらプロジェ

クトをどう起こすか検討する。プロジェクトを起こす、それを事業化するためにどの国、県又は市の施策を使うのかを検討する。違う形では、会員企業の事業、商品、技術、販路について検討をする。これは千差万別である。特に豊橋の産業部は手厚い施策があり、これを上手に使っている。事業化に当たっては、必ず当社のクラスターマネージャーをつけて、事業展開させている。



■ 農工商連携の認定を受けた事例について

食農クラスター事業を平成19年6月にスタートしてから3年が経つ。3年間活動してようやく、農水省、経済産業省の農工商連携認定事業に代表事例となった。

1つは田原にあるミマスの「トマト」、2つ目は、豊川にある寺部食品の「青じそ寄せ豆腐」、3つ目は、豊橋にあるライフ・リベットの「レモンパン」である。これら3つの事例が、この1年の間に認定を受けた。

まず、田原のミマスであるが、この会社は小売業である。トマトを栽培しているイシグロ農芸が、連携体として農業部分で参加している。その他連携体としては、卸の杉八、中埜酒造、磐田物産があり、この5社で商品を作っている。これが最初に農工商連携の認定を受けた。商品はトマトのカクテルである。連携体ではあるが、審査の中で原価計算を始め全て洗いざらい精査する。どこにどういう弱み、強みがあるのかと把握し、3年かけて新しく組み直すというようなプロセスがある。これにより、200ミリグラムのポケット瓶やメロンのカクテルなど派生的

な商品がどんどん出てきている。

農工商連携の良さは、今まではそれぞれ取引先という感じだったが、連携体という枠組みにより、先ほど大貝先生の話にあったように、連携から融合に変わってくるというところがある。融合に変わらないと、完成品にはならない。そういうところが、この農工商連携の大きな特色ではないかと思う。

2番目は、豊川の寺部食品の青じそ寄せ豆腐である。青じそ全国シェアの約6割を生産しているこの地域の生産者の方たちが協力して、3団体の連携体で認定を受けた。特に今回の場合は、愛知県の試験場でつくった「愛経1号」という、この地区ならではの青じそを使っている。手づくりのため販路が限られているが、名古屋の生協を中心に、かなりの数が出ている。青じそは、他にも、例えば関谷醸造が梅酒に、水鳥製麺がそばに利用している。ヤマサのちくわは、今年の6月は「うめしそ豆」だけだったが、今年の6月から「青じそ揚げ」を開発し、現在毎日1,000袋ぐらい売れていると思われる。他にもさくらFOODSが「餃子」を、三遠マイスターズクラブが「石窯青じそ食パン」と「青じそベーコン」というパンをつくっている。それから、神藤製麺が「青じそのパスタ」を、ラトリエ・ドゥ・テが「青じそクッキー」、「青じそマッシュマロ」を開発した。現在、青じその研究会は12社で、今年4月に23品目発表し、それぞれのルートで販売している。

これだけの商品が開発できた理由は、青じそをペーストに1次加工したことである。ペーストにすると1年間は保存でき、それを上手にそれぞれの商品に取り込んだ。国の支援も受けているが、2分の1であるので、研究会のメンバーはそれぞれ10万円を出している。

3番目が、つい1カ月ほど前に認定を受けた「レモンパン」である。ライフ・リベットという卸売業者が、河合果樹園さんの農薬不使用のレモンを使い、生産を行うら・ばるかや若竹荘とともに連携体を組んで、新しい商品を開発し

たものである。農商工連携のポイントは、複数の異業種の人たちが集まって連携体を組み、融合させて新しい商品をつくる場所にある。最終小売価格が決まると、そのコストに見合った価格で生産しなければならない。認定を受けて良かったのは、どこでコストがかかっているのか明確になったことである。また、どこがどれだけ儲かっているのか明らかになるので、この認証を得る事業体は、お互いに一体感を持って進めている。

最後に、食農産業クラスター推進協議会は今年で3年である。東三河で100社、遠州で9社、南信で4社、その他で3社、その他というのは、岡山とか広島、松山であるが、全部で116社、他に賛助会員で構成されており、オブザーバーには国が入って、この地域の事業を新しく作り変えていこうとしている。3年前の当初から三遠南信を視野に入れたのは、もともとつながっており、現在でもそういう商品がたくさん出回っているという地域であるからである。一番進んでいるのは、南信州である。浜松や豊橋のように平地の事業者の方が遅れている。この地域の自給自足経済圏を上手に使って事業展開をするというところが、この産業クラスター推進事業の大きな根幹である。農水省もこの地域のやり方をモデルにしており、今回の農業白書の中に事例が掲載されていると聞いている。そんなことをご報告申し上げて、終わりにしたいと思います。どうもありがとうございました。

4 「道」分科会 要旨

San-En-Nanshin Summit 2009 in Higashimikawa

「道」分科会では、「地域基盤形成による人・もの・情報の流動促進」をテーマに、南信州地域における三遠南信自動車道の整備状況とその効果の報告、道路建設促進のための各種団体の活動状況の報告及び重点プロジェクトの実現に向けての意見交換がなされた。

政権交代を受け、従来どおりの要望ではなく、国や国会議員に対する現地視察の呼びかけやデータを用いた具体的なアピールが重要であるとの意見や、三遠南信自動車道建設に関し伊勢を視野に入れ、浜松三ヶ日・豊橋道路や名豊道路との一体的に整備すべきとの意見、現道活用区間の整備のあり方を検討すべきとの意見のほか、リニア中央新幹線の早期建設を求める意見が出された。

コーディネーター	豊橋市	市長	佐原 光一
アドバイザー	豊橋技術科学大学	教授	大貝 彰
行政	磐田市	副市長	渥美 敏之
	田原市	市長	鈴木 克幸
	売木村	副村長	伊東 勝
	喬木村	村長	大平 利次
	飯田市	建設部長	菅沼 良收
議会	浜松市議会	議長	高林 一文
	豊橋市議会	議長	大沢 初男
	飯田市議会	議長	中島 武津雄
経済	掛川商工会議所	会頭	仁科 雅夫
	奥浜名湖商工会	会長	長坂 光男
	天竜商工会	会長	平賀 丈太郎
	豊橋商工会議所	会頭	磯村 直英
	蒲郡商工会議所	副会頭	伊奈 義兼
	東栄町商工会	会長	尾林 克時
	飯田商工会議所	会頭	宮島 八束
	駒ヶ根商工会議所	会頭	山下 善廣
	泰阜村商工会	会長	秦 和陽児
住民	特定非営利活動法人地域づくりサポートネット	副代表理事	山内 秀彦
	合唱劇「カネット」をうたう合唱団	普及委員長	清水 良文

(敬称略)

■ 第16回三遠南信サミット2009in遠州における「道」分科会の議論について

コーディネーター

前回の浜松サミットの分科会では、経済界、住民の方、そして行政が一緒になって意見を交わした。最初に、前回出されたご意見を確認したい。事務局からご紹介をお願いしたい。

事務局

まず、三遠南信自動車道の早期開通だけでな

く、浜松三ヶ日・豊橋道路との一体的な整備が重要であるということ。次に、三遠南信自動車道を始めとした道路を活用した地域ビジョンを持ち国・県に強く要望していくこと。3つ目に、リニア新幹線によって東海道新幹線のダイヤが柔軟になるなどの効果も期待されるということ。4つ目に、三河港や富士山静岡空港などのインフラを活用した三遠南信連携を強化すること。以上4点が前回の浜松の議論の中心であった。

コーディネーター

現在の三遠南信自動車道の整備状況や効果、また三遠南信道路建設促進期成同盟会の活動、そして、この10月27日に3市で行った要望について、飯田市建設部長・菅沼良收様からご報告をいただきたい。

■ 南信州における三遠南信自動車道の整備状況及びその効果について

飯田市建設部長



(1) 整備状況について

南信州における三遠南信自動車道の整備状況とその効果について、今日は、国土交通省中部地方整備局飯田国道事務所、長野県下伊那南部建設事務所から資料をいただいて報告をさせていただきます。

三遠南信自動車道は、一般国道474号であり、全体は、東三河、遠州と、南信州地域を結ぶ延長約100キロメートルの高規格道路である。長野県の飯田市から浜松市の北区引佐町までであり、供用済みの延長が14キロメートル、事業中が63キロメートルである。中央道の飯田山本インターチェンジから天竜峡インターチェンジまでの約7.2キロメートルと、小川路峠道路の矢筈トンネルの4.8キロメートル、この2か所が供用開始になっている。

地域と連携する効率的な道路ネットワークづくりということで、可能な区間については国道152号等の現道を活用するという事になってきている。そして重点整備区間への集中投資を行い、できるだけ早い時期に開通をさせたいというのが国の方針である。

静岡県側、水窪北から佐久間までは浜松市が実施するという形になっている。三遠道路の鳳来インターチェンジから引佐ジャンクションまでが重点整備区域ということで、浜松河川国道事務所で実施をしている。

飯橋道路2工区の水窪北から飯田東インターまでの区間については、全線にわたり、橋梁の下部工を中心に、工事が施工されている。飯橋道路3工区の水窪北から飯田東インターチェンジまでの区間については、現在、国土交通省により調査、設計に入っている。

県境の青崩峠道路は、現在は、人が通れる程度の道しかなく通行不能である。長野県側は飯田市道により兵越峠まで行き、静岡県の県道へつながっているという状況である。現在は環境影響評価書の縦覧が、長野県側、静岡県側とも6月に完了し、これに基づいた調査、設計に入っている。

矢筈トンネルから青崩峠までの21.1キロメートルは、現道活用区間であり、長野県の事業として国道152号の整備をしていただいている。そのうち12.8キロメートルについては整備が終了している。

向井万場拡幅、和田バイパス及び小道木バイパスの工事が始まっている。向井万場拡幅においては、小嵐トンネルを今、施工していただいております。470メートル程のトンネルが4月に着工して9月に貫通し、平成23年には供用開始と聞いている。和田バイパスは、施工中の状況で、相当形ができています。小道木バイパスは、地元の説明会を終了し調査、設計に入ると聞いている。小嵐バイパスは、国が施行する青崩峠道路との関連があり、現在調査中である。年内には説明会を開催しルートを決めたいと聞いている。

(2) 整備効果について

続いて、三遠南信自動車道の供用開始による効果であるが、1つは救急の患者の搬送である。3次医療施設の飯田市立病院に、阿南町の県立阿南病院から患者を搬送した場合、今までは、

151号を通して搬送していたため、約29キロメートル、約45分かかっていた。現在、三遠南信自動車道によって、天竜峡インターから中央道を経由して搬送しており、距離は約37キロメートルと長くなったが、時間は5分短縮することができた。開通後搬送した実績は59件であり、5分の短縮により助かる命も増えてきた。また、路面が安定して衝撃が軽減できたと消防から聞いている。

もう1つの効果は、旧南信濃村から飯田市立病院に通う場合に、バスと電車を乗り継ぎ2時間半かかっていたが、平成6年の矢筈トンネル開通により直通のバスが通って、60分短縮し、1時間半で行くことができるようになったことである。下宿をしていた高校生も自宅から通学できるようになった。このほか、飯田市の川路、そして下條村に企業が進出したという効果が挙げられる。

(3) 3市による要望活動、三遠南信道路建設促進期成同盟会の要望活動について

続いて要望活動であるが、10月27日に3地域の中心市である浜松市、豊橋市、飯田市の3市により国土交通省へ三遠南信自動車道及び浜松三ヶ日・豊橋道路の整備促進及び早期事業化に向けた要望活動を行った。三遠南信地域連携ビジョンに基づく、三遠南信地域250万都市圏の一体的な振興発展に欠くことのできない社会資本整備であることを前面に出し、対応していただいた馬淵国土交通副大臣にお願いをしたところである。副大臣には、県境を越えた広範な地域交流ネットワークづくりとして全国的にも類を見ない活動であるとの評価はいただいたが、報道などでもご存じのとおり、新規路線の事業着手に否定的な見解が示されている。

引き続き、12月1日には三遠南信道路建設促進期成同盟会による国土交通省を始めとする中央要望、12月9日には国土交通省中部地方整備局への要望活動が予定されているが、3県域に跨る三遠南信自動車道は、真に必要な命をつなぐ道であり、飯田市としても各種同盟会と連携

する中で、平成20年代後半の開通を目指して、あらゆる機会を通じて関係機関に強く要望してまいりたい。

■ 三遠南信自動車道早期開通期成同盟会及び浜松三ヶ日・豊橋道路建設促進期成同盟会の活動状況について

コーディネーター

三遠南信自動車道早期開通期成同盟会及び浜松三ヶ日・豊橋道路建設促進期成同盟会の活動状況について、豊橋商工会議所の磯村会頭からお話をいただきたい。

豊橋商工会議所会頭

まず、三遠南信自動車道早期開通期成同盟会のご報告をさせていただく。当同盟会は、浜松商工会議所会頭の御室様が会長であるが、今日は別の分科会に出席されているので、私からご報告をさせていただく。

この同盟会は、三遠南信地域の商工会議所・商工会で組織する三遠南信地域経済開発協議会の中に設置された機関であり、52の商工会議所・商工会のほか、圏域内の11のJAにも加わっていただき、産業界、農業界の立場から早期開通、整備促進を図るのが目的である。平成17年に設立をされて以来、国土交通省と財務省へ、代表幹事である浜松・飯田・豊橋の3会頭が中心になって要望活動を行ってきた。本年度は、9月9日に東名高速道路の浜名湖サービスエリアにおいて三遠南信道路のグッズ等を配布し、キャンペーン活動を行った。マスコミ各社にも取り上げていただき、アピールできたと感じている。

次に、浜松三ヶ日・豊橋道路建設促進期成同盟会の活動状況についてご報告をさせていただく。三遠南信自動車道は新東名と引佐ジャンクションで接続し、そこから新東名の引佐連絡路が三ヶ日ジャンクションと結ぶという計画があるが、当道路は、さらにそれを延伸して、三ヶ日ジャンクションから名豊道路、国道23号バイパスを結ぶもので、浜松三ヶ日・豊橋道路と呼

んでいるところである。この道路は、地域から発想した道路であり、政府や国土交通省の明確な位置づけがあるわけではない。しかし、本地域のものづくり産業そして農業関連の物流を担う新たな南北軸として、早い段階で候補路線として位置づけられるよう、強く訴えてまいりたいと思っている。

当同盟会は、浜松市、湖西市、新居町、豊橋市、田原市の五つの市町、そして商工会議所・商工会、J Aなど17団体で構成をしている。幸いにも平成20年2月の設立直後に調査費が計上され、平成20年度から3年計画で調査を実施していただいている。

■ 三遠南信、浜松三ヶ日・豊橋道路建設促進議員協議会について

コーディネーター

続いて、今年2月に設立された三遠南信、浜松三ヶ日・豊橋道路建設促進議員協議会の活動について、豊橋市議会の大沢議長からご紹介をいただきたい。

豊橋市議会議長

この分科会には、浜松市の議長さん、また、飯田市の議長さんもお出席をされているが、今日午前中に行われた三遠南信、浜松三ヶ日・豊橋道路建設促進議員協議会の会長に豊橋市がなったので、私から一言経緯の説明をさせていただきます。

平成21年2月10日に、浜松市において設立総会を行い、浜松、飯田、豊橋の賛同議員約115名を会員として、本協議会を立ち上げたところである。本日午前中に行われた当協議会には、3市だけではなく、圏域の5市8町10村の議長の皆様方にもご参加をいただいた。それぞれ3地域を代表して3市の議長さんに発言をいただき、三遠南信自動車道は産業や中山間地域の振興だけでなく、救急医療の充実、災害時の復旧支援ルートの確保等においても大変必要な基幹道路であるというお訴えをいただいた。こうした意見を基に、今後とも国に政策提言等をしていき

たいということである。

■ 地域基盤活用による効果について

コーディネーター

三遠南信自動車道やこれに連携する道路、港、空港、リニア中央新幹線といった地域基盤を活用することにより、地域間交流やまちづくりにどのような効果生まれるのか。また、早期実現に向けて、どのように努力をし、政策提言を行っていくべきか、ご発言をいただきたい。

田原市長

今、民主党政権になり、様々な面で枠組みが変わってきた。この三遠南信地域の道路についても、基盤整備の方法を考える時期ではないかと思う。都道府県の中で比較しても高い経済力を持つこの地域は、日本経済の大きな力となっている。将来厳しい状況の中で日本が生き残っていくためには、この地域はもっと潜在的な力を発揮することが必要だと思う。全国のモデルとなる県境を越えたこの地域をまとまりのある地域にするためには、一本の筋の通った背骨となる道路が必要だということを、明確に言うていく必要がある。

もう一つは、もっと具体性を持ったアピールをしていく必要があると思う。例えば農業では、田原市は農業産出額が全国1位であるが、耕地面積は2位の都城市の半分であり、この地域の農業は生産性が非常に高い。また、この地域は首都圏及び近畿圏に安定的に農産物を供給している大生産地である。こうしたことを具体的にアピールしていく必要がある。

また、三遠南信自動車道は伊勢までターゲットに入れた形でアピールする必要がある。三河港から高速道路までの所要時間や物流量等の具体的データを整理し示していけば、この地域を基盤整備していくことの重要性を実感してもらえるのではないかと思う。

合唱劇「カネト」をうたう合唱団普及委員長

飯田線は、かつて昭和初期にカネトというア

イヌの方が測量をして、昭和12年に開通したという歴史がある。今、三遠南信自動車道は、鳳来までは目途が立ち、また長野県側は天竜峡までインターが完成している。しかし、その間がなく、昭和初期の飯田線の敷設のときと同じことが起こっている。ただ、そのときと異なるのは、人口は減少し、経済は疲弊している点である。本当にこの何年間でその間が埋まるだろうかという危惧をしている。

先ほどの住民セッションでは、住民同士の交流がいろいろなところで行われており、そういうソフト面の活動をしていく必要があるという話をした。是非、経済界及び行政の方にも応援していただきたい。

天竜商工会長

三遠南信自動車道は、長野県まで通すことによって、いろいろと枝が出、花が開き、また実ると思う。今までのような交流をすることで、三遠南信自動車道が完成したときに、地域の人が地域に合うことを考えて生きていくことができると思う。

東栄町商工会会長

三遠道路は、引佐から東栄町までであるが、鳳来インターまでが重点整備区間ということで、今、何だか置いてきぼりになっている思いでいる。今、言われたように、道路というのはすべて完成してこそ100%力が発揮できると思うので、一体的な整備をお願いしたい。東栄町のことも忘れないでいただきたい。

浜松市議会議員

現実を見てシビアなことを申し上げたい。三遠南信自動車道には大きな期待があるが、お話のあったように、点と点が幾ら部分的に完成しても全く意味がない。

今騒がれているように、民主党は公共工事に非常にシビアな考え方を持っているということであるが、今回、要望に行ったときに、大臣、副大臣、あるいは担当のところで、政権交代の

影響をどのように感じたかということをお聞かせしていただきたい。

また、三遠南信自動車道で大きな負担となっているのが北遠地域の現道活用区間である。これは国の直轄事業ではなく、政令市である浜松市の事業となっている。しかし、政令市になったとはいえ、浜松市が、三遠南信自動車道全体と合わせたレベル又は速度で整備して行くというのは、技術的にも財政的にも極めて難しい話である。こういったところは浜松市だけの問題ではなくて、三遠南信地域全体の問題として捉えていただきたい。

このような状況下で、少しでも早く全線開通させるには、国へ強く要望をし、そして地域が抱えている諸問題を理解してもらうことが近道であると思う。その方法については、首長、そして我々議会も、これから真剣に考えていかなければならない。私は、それぞれ地域の国会議員に何度も現地に入ってもらい、この現実を見てもらうことが、一番効果があり最優先事項であると思う。従来どおりの要望活動だけでは難しい。

コーディネーター

東京に要請活動に行ったときは、民主党政権の受け答えはどのような様子だったのか。

豊橋市副市長 野崎智文

要望は10月下旬で、早2週間近く経っているが、非常に早いペースで物事が進んでいる。当時は、予算に関して相当切り込まなければいけないという前提があって、新しい箇所というのは難しいという話があった。ただ、必要性についての地域の声はいつでも伺うということであった。そこから先に踏み込んでというのはなかなかまだ出せないという話であった。

コーディネーター

私は別の場面で、設楽ダムの関係で国土交通省へ要望に行ったが、今の話と大体同じ雰囲気であった。三役自身もこれからどのような形に

なっていくかわからないのではっきり言えないが、自分たちとしてはよく理解できたという回答であったと思う。党内のルールが明確でなくどこを窓口とするのかははっきりしないのが不安である。

■ 重点プロジェクトの実現に向けての意見交換

コーディネーター

次に、早急にどのような取り組みをしていくべきか、ご発言いただきたい。

豊橋市議会議長

先ほど浜松市の高林議長から、政令市になったことを理由に静岡県が手を引いて、佐久間・水窪間を浜松市の事業とするのは大変酷ではないかという話があった。この区間は国の直轄事業として道路整備をするよう、この分科会として国に対し提言をしていくという提案をさせていただく。

浜松市議会議長

浜松市で事業を行うことになると、今までの分を含め 400 億円ぐらい持ち出しになる。現在浜松市の道路費の予算が年間で 200 億から 250 億である。その 1 年分以上のものに予算をつけるということは、難しい話である。民主党はエコに非常に力を入れている。佐久間から水窪あたりの天竜美林のすばらしい地域を、木材を積んだ大型トラックが排気ガスを多く出してのろのろ走っており、現道を整備しても環境対策にはならない。一つの戦略として環境問題を前に出して、道路整備が必要な区間であると提言していくのが良い。

特定非営利活動法人地域づくりサポートネット 代表理事

午前中の住民セッションの中で、三遠南信自動車道等の整備に合わせて、街道や古道を点と点でつなぎ、生活の道の維持を自分たちでやっていくという話があった。実は、秋葉街道にお

いては住民の連携が始まっている。都市部に対し中山間地域の歴史文化をアピールすることで、道路を使って中山間地域に来ていただくことが重要である。こういう事業を支援する仕組みがほしい。

国土交通省の「日本風景街道」という取り組みがあり、今、全国で 110 ルート、中部では 18 ルート、この長野、愛知、静岡の中では 12 のルートの登録があるが、この三遠南信は、ぽっかり穴が空いている。行政、経済界、市民が協働し、連携して風景街道に取り組むことが必要である。

掛川商工会議所会頭

大きな流れとして、国から地方へ財源を移譲して、地方のことは地方で考えて事業をするという傾向にあると思う。国直轄が難しいのなら、財源をまず地方へいただきたいという運動も重要ではないかと思う。

飯田市議会議長

基調講演にもあったように縦軸が不足しており、三遠南信地域においてはその縦軸が、まさに三遠南信自動車道であり、背骨となる部分である。その背骨の部分に関し、もし飯田市がその一翼を担うとすれば、2025 年のリニア新幹線の飯田駅設置と同時期に、この三遠南信自動車道が開通するよう進めることである。



コーディネーター

リニアの話があったが、リニアと道路、地域の縦の連携をどのように活かしていくのか、ご意見をいただきたい。

飯田商工会議所会頭

昨日、長野県内のリニア推進協議会に対する、第5回目になるJR東海の説明会が松本で行われた。以前に東京・名古屋間の経費、東京・大阪間の経費が発表されている。南アルプス直線ルートと比べ、諏訪回りのBルートの場合は建設費、車両費で6,500億円余分にかかり、毎年の維持費は350億円余分にかかる。長野県が要望する諏訪回りのルートになったときの経費の差は、国も長野県も負担できない。JR東海によると、過去のデータを集めた結果、直線ルートで間違いなく開業できるとのことである。私も飯田駅ができるものとして地域全体で盛り上げているところである。観光面でも、飯田で降りたお客様が三遠南信自動車道を使って豊橋・浜松方面に回るという期待感もある。途中経過であるが、報告させていただく。

天竜商工会会長

三遠南信自動車道ができてリニアが仮に飯田に停まれば、1時間ほどで佐久間から東京へ行くようになる。名古屋の次がすぐに飯田になるが、リニアが停まる可能性があるのかと思っている。

コーディネーター

名豊道路についてご発言いただきたい。

蒲郡商工会議所副会頭

名豊道路は、蒲郡の西の部分は既に着工しており、橋脚ができている。ところが、東の部分は未着工であり、これから概ね10年間で完成し、全線の開通となるということである。蒲郡は、三遠南信の西の外れであり、浜松に直結する23号については期待が大きい。政権が変わったことで東の未着工部分が、頓挫しないように全会一致で国に訴えていただきたい。

コーディネーター

東の部分というのは御津と蒲郡の間の部分である。これも、つながらずにいるために効果が

半減している部分である。

皆様から多くの意見をいただいた。それでは、アドバイザーの豊橋技術科学大学の犬貝先生からご意見をいただきたいと思う。犬貝先生については、全体会でもご報告をいただいているが、三遠南信地域を学術的な立場で研究をされており、道路整備効果を調査し、交通、経済、環境の連携の統合モデルをつくっておられる。そうした観点も含めてご意見・アドバイスをいただきたい。

アドバイザー

皆様のご意見を聞いた範囲で、コメントさせていただきます。

三遠南信自動車道については、皆様のご発言のとおりであって、地域の経済界、行政、そして民間も長い間様々な活動をされてきた。その活動をこれからも継続していく必要がある。ただ1点申し上げたいのは、政権交代もあり、単に問題があるからと要望しても国は予算をつけないだろう。やはりこの地域の魅力やポテンシャルを積極的に示していくことが必要だと感じた。一方で、中山間地域の住民レベルの様々な活動も積極的にアピールすることも非常に重要だと思う。

EUの国々の道路の整備状況を見ると、田舎でも日本と比べものにならないくらいすばらしい道がある。そこから考えると、日本の道路は本当に寂しい限りである。道路は、産業を支え、生活を維持する基盤であり、その整備は絶対に必要だと考えている。そのために、この三遠南信地域全体が一体となって行動を起こしていくことが必要であると考えている。

幾つか意見の中で、道路整備の実現のためにはデータの分析が必要だという話があった。これについては、シンクタンク、コンサルだけでなく、我々この地域にある大学としても様々な側面からは是非協力をさせていただきたい。昨年、中山間地域における日常サービス施設へのアクセス道路について、車で移動する時間距離を計測した。水窪や天竜などの浜松の北の地域、そ

して飯田の南側、南信濃が、暮らしを維持するのに非常に厳しい地域であるというのが見えてきた。それが、三遠南信自動車道ができることにより、かなり時間短縮ができるということがデータで示されている。そのようなことも大学の中で研究しているので、これから活用していただければと思う。

コーディネーター

皆様のご協力によって、円滑でかつ中身のあ
る意見交換を行うことができた。心から御礼を
申し上げたい。以上を持って、「道」分科会を閉
会させていただく。

5 「技」分科会 要旨

San-En-Nanshin Summit 2009 in Higashimikawa

「技」分科会では、「県境域の持続的発展に向けた産学官連携・農商工連携への期待」をテーマに、三遠南信バイタライゼーション協議会の活動など重点プロジェクトに沿った報告が行われた。

その後の意見交換では、地域資源の発掘活用、異業種間の情報交換、キャッチコピー等による情報発信、既存の産学官連携事業の三遠南信地域全体への拡大、連携から融合への転換について、その重要性、必要性が確認された。

コーディネーター	愛知大学	三遠南信地域連携センター長(経済学部教授)	岩崎 正弥
アドバイザー	株式会社サイエンス・クリエイト	代表取締役専務	中野 和久
行政	浜松市	市長	鈴木 康友
	蒲郡市	副市長	足立 守弘
	豊根村	村長	熊谷 卓也
	松川町	副町長	松下 義明
経済	袋井商工会議所	会頭	高橋 芳康
	豊川商工会議所	副会頭	日比 嘉男
	小坂井町商工会	会長	丸山 登三雄
	田原市商工会	会長	山田 俊郎
	渥美商工会	会長	渡会 一昭
	阿智村商工会	会長	片桐 美治
	三遠南信バイタライゼーション協議会	会長	柴田 義文
住民	特定非営利活動法人佐奈川の会	会長	近藤 健治
	祭り街道の会	会長	池田 弘志

(敬称略)

■ 第16回三遠南信サミット2009 in 遠州における「技」分科会の議論について



コーディネーター

今回の「技」分科会のテーマは、「県境域の持続的発展に向けた産学官連携、農商工連携への期待」である。今日は、三遠南信地域連携ビジョンの政策の基本方針「技」の4つの重点プロジェクトを中心に議論を進めてまいりたい。時間があれば、フロアの皆様方からのご意見、ご質問等々を受け付けたいと思う。

まず、「技」の重点プロジェクトの3つ目、「特徴ある産業クラスター拠点づくりと県境を越えた事業連携」に関連して、三遠南信バイタライゼーション協議会会長の柴田義文様より、三遠

南信バイタライゼーション協議会の活動について、ご報告をいただきたい。

■ 三遠南信バイタライゼーション協議会の活動について

三遠南信バイタライゼーション協議会会長

三遠南信バイタライゼーションについてご説明申し上げます。

産業クラスター計画は、経済産業省から承認された事業で、平成14年から始まり、5年間で1期として、現在2期目に入っている。産業クラスターとしては初めて浜松、飯田、東三河というような県を跨ぐ地域に指定されたものである。

3地域に支部をつくり、連携を保って基盤技術の高度化や次世代産業の創出にそれぞれ取り組んでいる。浜松を中心としたオプトロニクスクラスターの中には、知的クラスター創成事業、産業クラスター計画、地域結集型共同研究事業がある。

地域中核産学官連携拠点光電子技術イノベーション創出拠点という事業が今年の7月12日に地域指定された。浜松医科大学、静岡大学のほか、第2期から豊橋技術科学大学も参加している知的クラスター創成事業では、イメージング技術という光を受ける技術に取り組んでおり、浜松ホトニクスが主体となった地域結集型協働研究事業では光を出す技術に取り組んでいる。こういうもので静岡大学、浜松医科大学、豊橋技術科学大学、光産業創成大学院大学が連携し、新しい産学官連携拠点を創出しようとしており、既に製品化されているものもある。それぞれの大学の特徴ある技術で、医工連携、農商工連携等をし、輸送用関連次世代技術、健康医療関連産業、光エネルギー産業、新農業に取り組んでいる。

浜松支部の取り組みを申し上げますと、大学と一緒にあって、オプトロニクスクラスターを推進しており、文部科学省、経済産業省等関係省庁に支援していただいている。

浜松支部は、産業クラスターとして浜松商工会議所が中心になっており、様々なグループ、

団体の協力を得ながら新産業創出事業等の事業を推進している。最終的には浜松は関東経産局、豊橋は中部経産局の指導を受けている。これをまた3地域へ拡大しようと考えている。

浜松支部には、宇宙航空研究会、医工連携研究会、農工研究会、光関連技術研究会、輸送用機器研究会があり、浜松地域の各企業の方に参加していただいている。新連携等支援地域戦略会議は、中小企業基盤整備機構が受けたもので、何社かが組んで新製品を開発している。浜松の場合はプロジェクトマネージャーを置いて、この方の指導で現在20数件の事業を推進して、製品化を行い、売り上げも上がりだしている。

農商工連携では、浜松の場合は、勉強会や視察会を開催し、製造業等の方の知識を吸収し取り組んでいる。

■ ビジネスマッチングの促進について コーディネーター

重点プロジェクトの1番目ビジネスマッチングの促進については、東三河地域ではどのような状況かご説明いただきたい。

豊川商工会議所副会頭

この地域にある、飯田、浜松、磐田、掛川、遠州、豊橋、蒲郡と私ども豊川の8つの信用金庫で、昨年、浜松において第1回の三遠南信しんきんサミットを開催し、それぞれの地区の特産物をご紹介いただいた。今年は、10月6日、このホテル日航豊橋で、農商工連携をテーマに開催させていただいた。82社に出店していただき、そこで試食、試飲、一部販売をして広く商品をPRしていただいた。私どもは、それぞれの地域の特産物を県境を越えて相互に紹介し、新しい商品の開発や販路拡大につなげていただきたいと願っている。当日は3,000名の方にご来場いただき、商談も個々に行われていたようである。

豊川信用金庫も単独で毎年「かわしんビジネス交流会」を開催し、互いの技術あるいは産物等を紹介していただいている。今年は豊川市総合体育館で開催したが、142社に参加していただ

き、2日間で約5,000人の方にお越しいただいた。

地元と関係の深い信用金庫がいろいろな意味でお手伝いできればと前向きに取り組んでいるところである。

■ 国内外に向けた人材・企業誘致の活動促進について

コーディネーター

続いて、重点プロジェクトの2つ目、国内外に向けた人材・企業誘致の活動促進に関して蒲郡の副市長の足立様からご報告をいただきたい。

蒲郡市副市長

海外に様々な日本の企業を移すという話が多くある中で、東三河地域に国外の企業を誘致してくるといえるのは、大変難しい話である。一般的に人材を確保するという事になると、海外の労働力を使おうという時代があったが、それは一つの区切りをつけて終わっている。必要なのは、ビジネスマンや先生方、研究者、そういうプロフェッショナルの方とのネットワークを形成し、共通課題を解決していくことである。三遠南信地域に必ずしも来る必要はない。生身の人間や企業がここに来るといえることも大事であるが、それに加えインターネットの利用を考えていく必要がある。

外国企業の誘致ということであれば、三河港の中に外国の自動車の会社の誘致や、ジュース会社の誘致をやってきたが、規制が足かせになる場合があり、もっと自由な動き方ができるような環境づくりが必要ではないかと考えている。

■ 産業クラスター（光電子技術イノベーション創出拠点事業）について

コーディネーター

続いて、先ほど柴田様からこの3番目の重点プロジェクトに関して報告をいただいたが、改めてこの産業クラスターに関連して、今度は浜松市長の鈴木様から、光電子技術イノベーション創出拠点事業についてご報告をいただきたい。

浜松市長

先ほど柴田さんからわかりやすくご説明をいただいたので、私からはクラスターの背景等について補足説明をさせていただく。産学官連携というのは、歴史的には古くからあり、全国的には成功したところ、失敗したところいろいろある中で、この地域は産学官連携が比較的うまく進行した地域である。文部科学省の知的クラスター、あるいは経済産業省の産業クラスターの認定をいただき、幾重にも国の支援を受けながら産学官連携を進めてきた。

かつては、文部科学省と経済産業省がそれぞれ同様のクラスター計画を別個に進めていた。国会議員だった私は、経済産業委員会として、非効率であり統合した方が良くと申し上げたが、ここに来てそのような動きになっている。

そして、今度の文部科学省と経済産業省が合同で行う新たな産学官連携の拠点づくりは、限られた資金の中、投資効果のないところには支援をしないというものである。いわゆる地域中核産学官連携拠点と、もう一つ、スケールの大きいグローバル連携拠点の2つに分けて、産学官の連携拠点を集約し、認定を受けたところに集中的に国が支援をするという枠組みとなった。

よって、今回の国の認定を受けられないと、今後国の支援というものが薄くなってしまう。私どもとしてはなんとしても認定を受けるべく、浜松地域と東三河地域合同で光電子技術イノベーション創出拠点という形で、この産学官の地域連携拠点に応募をした。

この地域における産学官連携のこれまでの実績や、今回応募した新たなクラスター形成の計画が非常に高く評価され、国の認定を受けることができた。これで、今後10年間にわたって集中的に国から様々な支援をいただき、持続的にイノベーションを創出ができることになる。これを利用して、光電子技術により新産業の創造や既存産業の高度化に取り組んでいるところである。

私どもとしては、今は浜松地域と東三河地域合同でやっているが、これを是非三遠南信地域

全体に広げていきたい。飯田市を中心とする南信州は、産業的に非常に様々な資源をお持ちのところである。是非南信州も含めてこうした取り組みをしていきたい。

そういう意味で、この三遠南信地域というのは非常に可能性の高い地域である。みんなでタッグを組んでこうした取り組みをしっかりとやっていきたい。

■ 大学フォーラムの設置について

コーディネーター

それでは、重点プロジェクトの4番目、大学フォーラムの設置に関して、私から報告をさせていただきます。

私は現在、愛知大学三遠南信地域連携センターにいるが、三遠南信地域大学フォーラムの設置に関して、三遠南信の各大学の学長会議や学生の単位互換といった相互協力は、残念ながらほとんど進展していない。

先ほど全体会の中で豊橋技術科学大学の大貝先生より報告があったが、愛知大学と豊橋技術科学大学の間で、三遠南信のエコ地域づくり戦略プロジェクト研究会という連携融合事業がスタートしている。これは来年、5年目の取りまとめの年になる。そういう形でのプロジェクトは若干動き始めている。

それから、愛知大学三遠南信地域連携センター単独の活動としては、三遠南信をテーマとする一般市民向けのコミュニティカレッジを積極的に開催してきた。今年は「食」をテーマに三遠南信の食と農を取り上げた。

また、国や県と共催で豊川流域大学や豊川流域圏講座というコミュニティカレッジを開催した。その卒業生たちが、いわば越境プレイヤーとして、自ら地域づくり活動を始めている。

しかしながら、結論的には、この重点プロジェクトの4は、まだ進展しない状況にあるといえる。

補足説明として4つの重点プロジェクトを私も含めて4名の方にご報告いただいた。今日、私の隣におられる中野さんは、アドバイザーとして昨年もこの「技」の分科会のアドバイザーを

務めていただいた。この1年間でどういう進捗状況にあったのかということを経局的にコメントしていただきたい。

アドバイザー

農商工連携は、昨年4月から農林水産省及び経済産業省と一緒に始めてのものであり、東三河では3つの認定を受けた。

もう一つ、今年の1月から2月の初めにかけて、アンテナショップとして浜松と東京で約40社、山間部の商品を中心に約40品目集めて、2日間ずつ販売した。浜松では、東三河と浜松の山間部の商品に比べ、南信州の商品が圧倒的に売れた。東京の下町、大山の商店街では、売り上げは多かったが、東三河、遠州、南信州について100人の客のうち1人か2人しか知らない状況であった。この地域を売るには、徳川家康や武田信玄など、なるべくこの地域をイメージさせる人をPRした方がよいのではないかとというのが、私の印象である。

もともと山間部の商品の売り方が議題になっていたので、アンテナショップを開催したのは大きな進歩ではないかと思う。

■ ショルダーコピーについて

コーディネーター

質問があれば会場からも伺いたい。

豊橋市議会 伊藤議員

質問させていただく。地域の売り出し方において、今、必要なのは、その地域を売るための物語づくりであり、そのためのショルダーコピーの重要性がいわれている。地域の特徴を上手くつかんだコピーをお考えの方がいらっしゃったらお伺いしたい。

例えば豊橋の第4次総合計画では「笑顔がつなぐ緑と人のまち・豊橋」があるが、どこの都市でも当てはまるものではなく、三遠南信ならではのものがおもしろい。先ほどの武将の名前などキーワードを上手く当てはめ、みんなが納得するショルダーコピーを考える必要がある。

それは日本はもちろん、世界に通じる必要がある。そのためには、優れた企画を考える人間が必要で、そのシュルダークのコピーの下には様々な戦略と戦術がなければならない。地域の発信というのはそういったものではないかと思う。

浜松市長

現在、浜松市も、街をどうやって国内外に売り込んでいくかというシティプロモーション活動を行っている。首都圏向けの浜松の情報誌を発刊したり、私自身も営業マンとして走り回っている。一言で浜松をどう売り出すか、これは実は大変大きな悩みである。浜松は、三遠南信の各自治体と同様に、良いものを多く持っているからである。これしかないという地域であれば、それ1本で売り込むが。

私は、例えば浜松市で言えば、日本一住みやすい街だと思っている。浜松市では、浜松出身でない、転勤で各地を回った人が、終の棲家にするケースが非常に多い。それは医療体制、自然環境、インフラ、人間性、都市機能等いろいろ理由があると思うが、トータルに住みやすさを感じるところであると思う。それをどのように全国に発信していくのか、悩んでいるところである。

豊橋市議会 伊藤議員

浜松は住みやすいと思うが、「日本一住みやすい」というのはどこでも掲げたいコピーである。何か良いシュルダークコピーを考えられることを大いに期待する。

小坂井町商工会会長

三遠南信というのは、一般住民にとっては、三遠南信自動車道の建設促進が主な事業と捉えているが、三遠南信の地域活性化を図るということも大きな課題である。私どもは、年1回の小坂井町のお祭りにおいて、豊根村の特産物を販売し、交流を深めている。各地域の祭等で、各地の特産物を販売するコーナーを設け交流を深めたら良いのではないか。昨年の課題に情報の

連携、情報交換があるが、一般の住民に三遠南信の実態というものを知ってもらうために、そのような活動が望ましいのではないか。

蒲郡市副市長

シュルダークコピーは、その街の目指すべき姿を表し、市民の中に共通認識が生まれるという効果がある。

■ 重点プロジェクトの実現に向けての意見交換

コーディネーター

後半は、重点プロジェクトの実現に向けて具体的な意見交換をしたい。

これからのこの三遠南信サミットは、やはり住民の参加が非常に重要だと私は考えている。午前中の住民セッションの「技」で話し合われた中身を若干紹介いただきたい。

特定非営利活動法人佐奈川の会会長

3年前から住民セッションに係わらせていただいております、また、今年は豊橋開催ということで、企画段階から参加させていただいている。住民セッションでは、分科会と同じように4テーマに分けて、意見交換をした。

「技」のグループでは隣にいらっしゃる池田さんの提案により農業技術について取り上げた。池田さんはトマトの栽培で大臣表彰を受けた方で、農業の取り組み方、阿南町での暮らしなどについてご報告いただいた。

現在は、年に1回この三遠南信サミットで集まり、様々な分野の意見交換をしているが、それだけではなく、多くの人実際にその地に行き、その文化に触れることで、三遠南信の人々の心がつながるよう、具体的にこれから詰めていきたいという話をした。

コーディネーター

農商工連携は、別名6次産業、つまり1次、2次、3次を掛けてあるいは足して6次産業といわれるが、そういう意味で農商工連携というのは

地域連携産業だと思う。それぞれの地域をつなぐという役割が農商工連携にはあるのではないか。そのような観点から中山間地域の農商工連携を考えたかどうかと思っている。中山間地域では農商工連携に対して非常に積極的だと聞いているがどうか。

阿智村商工会会長

南信州においては根羽村商工会、平谷村商工会、私たち阿智村商工会の3商工会が広域連携をしている。事業としては、スローライフ、スローフード運動の推進に取り組んでいる。地域の食材を大切にしながら、地域の農家を活かすような商工業の存続及び発展を検討するものである。東京から有名なシェフを招き、地域の食材を使った弁当やおやきの味比べ大会を3回開催した。

昼神温泉、スキー場等を活用し、食材の販売を行っている。地域の風土にあったキクイモ、ヤーコン、ニンニク等の出荷施設が3つほど建設の運びとなっている。県境を越えた交流も盛んで、豊田市の産業フェスタや中津川市のふるさと自慢まつりに参加している。さらに交流を深める必要があると考えている。

コーディネーター

今後のこのプロジェクトをさらに実現していくため、具体的な何か提言があればお願いしたい。

袋井商工会議所会頭

静岡県では食の推進会議というものがあり、そこでは消費者団体等が地産地消を推進している。しかし、現場サイドでは様々な問題がある。曲がったニンジンや切りにくい、必要なときに必要な量のジャガイモがそろわないなど使い勝手が悪いのである。地産地消は良いことであるが、これを進めていくには現場の声に配慮していただきたい。

祭り街道の会会長

阿南町は、今年、信州アトムという会社を立ち上げ、遠鉄ストアと提携し、高原野菜を出荷している。評判が良く来年も続けていくのでご報告したい。

渥美商工会会長

渥美商工会では、農商工連携事業について大変苦労している。食の安全安心を保つための取り組みをしている。渥美半島から豊橋にかけては、気候が温暖で大変恵まれた地域であり、今後も美しい地域としてきたい。

田原市商工会会長

企業誘致に関してお話させていただく。田原市の臨海部には未利用地があり、6回ほど企業誘致説明会を行った。幸いにして、電炉メーカーが11月24日に操業する運びとなった。企業誘致については、新城市、豊川市、豊橋市と協力して行っている。

以前から別の電炉メーカーがあるため、豊橋の港には浜松や静岡で出されたスクラップが集積されている。新たに進出した企業が操業すると物流も変わってくると思う。

豊橋の港は、ベンツは撤退したが、2類港であるので料金を安く設定することができ、海外に対しても競争力がある料金で対抗できる。

松川町副町長

三遠南信地域は大変ポテンシャルが高いが、南信州は規模が小さい。しかし、小さいながらも重要な役割があるように感じている。産学官連携における南信州の特徴としては、電子、精密、光産業技術を得意としており、三河、遠州の皆様と提携し、重要な部品を提供している点である。また、農商工連携においては、果物に頼っている中、リンゴを使ったリンゴバターどら焼、山ブドウを使ったワインづくりに取り組んでいる。

袋井商工会議所会頭

産学官連携事業については、袋井市の理工科大と取り組んでおり、1年に1回発表会を行っている。その中で、キャップをひねると粉が落ちて新鮮なお茶が飲めるという商品を開発した。問題は、大学側は商品化に非常に時間をかけており、民間と感覚が違うという点である。大学側が門戸を開いて好意的に取り組んでいただいているが、それを活かしかねない状況である。

コーディネーター

最後にまとめをさせていただきたい。まずアドバイザーの中野さんからご意見をいただきたい。

アドバイザー

ただいまの産学官連携における大学と民間との感覚の違いについては、大学の中や民間にいるコーディネーターを間に入れると良いと思う。

三遠南信は街道が非常に多く、それをどのように活用するのが非常に大きなテーマである。住民の方たちに頑張っていただき、人を呼び込んでいただきたい。

2ヶ月の間に様々な祭りを行い一斉に三遠南信地域を発信する。また、桜が渥美半島で咲き始めてから南信州にいくまで1ヶ月間かかることから、この地域では1ヶ月間桜が見れるということを発信する。このような生活産業がこの地域にはある。

コーディネーター

最後に皆様から意見の集約をさせていただきたい。

まず1つ目は、情報交換の重要性である。実際に集まったりインターネットを活用したりする中で情報交換、異業種交流をし、新たな発想、イノベーションが生まれる。

2点目は、情報発信である。三遠南信は、知名度は低いが様々な地域資源が眠っている。ショルダーコピーや見せ方ということを含めて情報発信の方法を詰めていく必要がある。

3点目は、産学官連携、農商工連携に関して、選択と集中をしていく現在の状況のなか、これまでの実績を基に、産学官連携の拠点をさらに三遠南信地域で上げていくことである。

4点目は、連携から融合へという時代に来ているということである。産学官連携、農商工連携を融合に高めるための具体的な取り組みが必要である。

皆様のご協力により円滑かつ内容の濃い意見交換ができたと思う。心よりお礼を申し上げる。

以上をもって「技」の分科会を閉会する。



「風土」分科会では、「塩の道に培われた歴史・文化資源を活かすネットワークづくり」をテーマに、祭り街道についての報告及び重点プロジェクトの実現に向けての意見交換がなされた。

連携事業における住民と行政の役割分担や、伝統芸能の継承のあり方（積極的に地域外に広めるのか、地域内で伝統芸能の本来の形を守るのか）について意見が交わされた。また、身近な地域資源を積極的に活用すること、あるいは既に取り組んでいる活動を進めていくことが、重点プロジェクトの実現につながっていくと確認された。

コーディネーター	市民団体連携委員会	委員長	原田 敏之
アドバイザー	野外教育研究財団	理事長	羽場 睦美
行政	湖西市	副市長	宮崎 隆広
	新居町	町長	中嶋 正夫
	豊川市	市長	山脇 実
	東栄町	町長	森田 昭夫
	阿南町	町長	佐々木 暢生
	天龍村	村長	大平 巖
	大鹿村	村長	柳島 貞康
経済	新城市商工会	会長	本多 克弘
住民	三遠南信文化交流講座	講師	松田 不秋
	三遠地方民俗と歴史研究会	副会長	仲井 政弘
	祭り街道の会	事務局	伊東 直幸

(敬称略)

■ 第16回三遠南信サミット 2009 in 遠州における「風土」分科会の議論について

コーディネーター

まず、前回2月に行われた浜松のサミットにおける議論について一度確認をし、それを踏まえた上で進めていきたい。事務局に説明をお願いしたい。

事務局

第16回三遠南信サミット2009 in 遠州での分科会においては、三遠南信地域は広く、歴史や風土の違いも存在していることから、交流・連携することの必然性や必要性の認識をすべきである。次に、三遠南信地域の自然、伝統文化等の厚みのある地域資源を誰がプロデュースする

かが問題である。最後に、具体的な議論は進んでおり、その先に踏み出す仕組みづくりと議論の場を増やすことが必要である、という議論がなされた。

コーディネーター

それでは、最初に祭り街道の会の伊東さんから、祭り街道の事業の内容等についてご報告いただきたい。

■ 祭り街道について

祭り街道の会事務局

私たちの三遠南信地域では、秋葉信仰の秋葉街道、元善光寺参りへの遠州街道、中山間地域と平野を結び、塩を始め様々な産物を運ぶ、生

活を支える街道があった。街道を行き交う人々によって、この地域に様々な祭り文化が運ばれた。



阿南町新野に伝わる新野の雪まつりは、伊豆から来た領主によって始められ、また、新野の盆踊りは、新野の瑞光院の開山式のときに今の東栄町、三州振草下田から人々が来て、皆様に踊ってもらったのが始まりと言われている。和合の念仏踊りも遠州の大念仏の影響を受け、この地域ならではの祭り文化が育ってきた。

しかし、明治の時代になって県境の壁に分断をされた。近年は153号沿いには中央高速道路ができ、152号沿いには近い将来、三遠南信自動車道が通ることになっているが、151号が取り残されていくような気がしていた。

そこで、151号を「(愛称) 祭り街道」と命名し、21世紀のふるさとづくりに取り組もうと、まず仲間づくりをスタートした。

長野放送の広報番組「祭り街道に行く」や、中部建設局のプロジェクト情報誌で、私たちの活動を取り上げていただき、広くアピールをしていった。平成11年には、151号沿線の盆踊りの4団体を招いて、祭り街道盆踊りフェスティバルを開催をすることになり、このイベントを契機に東栄町の皆様と交流が始まった。

この交流の中で、祭りの衰退というものは地域の衰退につながるため、何とか祭り文化を育てていこうという話になった。行政にも働きかけて、この祭り街道を広く理解していただくため、東栄町の町長さんとも懇談した。

祭り街道の看板は、東栄町や豊根村にも立てていただき、祭り街道と一緒に盛り上げていた

だいている。そして今年10周年の祭り街道フェスティバルを開催することになった。

「私たちの三遠南信地域を天上の高いところから見渡すと、緑の山に囲まれたそれぞれの地域に、素晴らしい祭り文化が光輝いています」という三遠南信星座論がある。私たちは、祭り街道銀河都市記念という言葉をも天上へ設置しようということで、2007年、宇宙衛星かぐやに祭り街道銀河都市記念を印字して登載し、打ち上げていただいた。こうした取り組みを通して、151号を祭り街道として皆様に親しんでいただき、さらに点から線へ、線から面へと、三遠南信地域全体が祭り文化圏としてアピールできるところになっていけば良いと考えている。

■ 「風土」に関する連携事業の活動状況について

コーディネーター

ここからご意見等を承ってまいりたいが、午前中の住民セッションではどのようなお話が出たのか。

三遠南信文化交流講座講師

三遠南信地域は、歴史、文化の宝庫であるが、次第に伝承文化を支える人が減少しているという意見や、歴史や文化が本当に観光資源になっているかという意見があった。それをどうするかという問題は、十分な議論を尽くすまでには至らなかったが、やはり自分たちが存続の努力をしていかなければいけないとのことだった。

コーディネーター

地域の文化を、広域的な交流、連携によって展開している事例があったらご紹介いただきたい。

湖西市副市長

湖西市にはふるさと農村歌舞伎がある。大鹿村を始め4市1町1村と8、9の保存会により、三遠南信ふるさと歌舞伎交流大会を平成6年から毎年開催しており、交流をさせていただいている。

新居町長

新居町は湖西市と来年3月23日に合併する。明治22年、町制施行から120年の歴史を持つ町である。歴史、文化としては、日本でただ一つ残る関所がある。これは徳川家康が三方原で武田信玄に負けて逃げるときに、新居の領主が徳川家康を助けたことから始まっている。夏には120年を記念して大納涼祭を開催したが、住民参加が一番大事だと感じた。手筒花火は、豊橋、豊川とともに有名で、今年は全国伝統花火大会を開催した。全国花火大会へは豊橋、豊川、蒲郡、旧清内路からも出ていただいた。

三遠地方民俗と歴史研究会副会長

三遠地方民俗と歴史研究会は年に1、2回地域の民俗芸能を見に行く。3月には西浦田楽を見学する。水窪の西浦田楽は演出がすばらしい。民俗芸能は、実際に見て初めて良さがわかるものである。実際に見ていただくことが各市町村の間の交流につながる。

大鹿村長

先ほど話が合ったように、第16回の三遠南信歌舞伎交流を、今年大鹿村で開催した。課題は、新たな広がりが点である。

後継者不足がどこも悩みのようである。大鹿村では、30年前から中学生が、3、4年前からは小学生が歌舞伎をやっており、ここ何年かはUターンの人を取り組んでくれており、非常に喜んでいる。

文化をつないでいくには、行政や経済界からのある程度のバックアップが必要である。特に歌舞伎の場合は衣装やかつらに大変費用がかかる。豊橋市さんや湖西市さんは、文化庁の補助金をもらって続けている。

東栄町長

先ほど伊東さんから祭り街道のご報告をいただいたが、もともとは新野の方から東栄町で盆踊りをやっている方々に話があり、交流が始まったようである。東栄町では、実は盆踊りが

非常に廃れていた状態であったが、祭り街道の会の方たちとの交流により復活した。

花祭りは東栄町だけではなく、隣の設楽町にも、浜松市にもある。新野には霜月祭りもあるが、名前こそ違いますがルーツは同じようなもので、もともと非常に交流が盛んであった地域ではないかと思う。

民間の方々が阿南町の皆様方とおつき合いを始めてから、祭りだけではなく、新しい商品を生み出す動きも出てきている。

天龍村長

天龍村では、坂部の冬祭りがあり、村内3つの祭りを一括して天龍霜月神楽として国の無形文化財の指定をいただいている。この祭りは、もともと信仰の中で一年の豊穡を神に感謝し行われてきたものであり、開催すべき時期、時間帯に、その場所で行うというのが本来の姿である。

ところが時代が変遷し、大勢の人に見ていただくことによって後継者も気持ちに張りが出るということもあつてか、全然違う時期に、他の地域へ行って、ムードも全然違う中で祭りを行うということが広まってきた。私は、本来の姿と違うのではないかと、深いすに座って劇場で同じ舞を見ても感動はないのではないかと、いうことを申し上げてきた。

文化財の伝承にはどうしても費用がかかる。その意味で「この地域資源を誰がプロデュースするかが問題である」というところに、私は非常に興味を持っている。金と後継者がいないと伝統がなかなか継承できない状況であるが、本来の姿を忘れてはならない。

阿南町長

祭り街道の10周年として、今年の9月20日、阿南町の新野道の駅で東栄町、豊根村の花祭りが同時に開催され、私も感銘を受けた。飯田市から豊橋市までの全線で参加していただき、国道151号全線が祭り街道となるようにしたい。できることならば、祭り街道サミットの開催という夢を申し上げたい。

ただ、こういう伝統芸能は、高齢化により伝承が非常に厳しい状況にある。働く場所としての農業、林業というものがあってこそ初めて伝承できるものである。この度の政権交代により、農村整備等については非常に厳しい意見がある。当サミットからも国へ訴えていくという課題があると思う。

豊川市長

豊川市は来年2月1日に小坂井町と合併する。三度の合併を経て宝飯郡が一体となるという状況である。合併を記念して、音羽町の東海道赤坂宿で、地元の住民の方の発案により小屋がけを復興した。そこで旧宝飯郡一宮町の金沢歌舞伎を演じていただいた。一昨年は、新城の子供歌舞伎も来ていただいて、大分好評であった。

この地域は、戦国時代は、東は今川、西は徳川、北は武田という大勢力の狭間で、厳しい情勢であったこともあり、多くの城跡が残っている。これを利用し戦国時代を偲ぶような交流連携ができればと思う。

また、豊川稲荷はいなり寿司の発祥の地であり、現在、観光協会が「豊川市を盛り上げ隊」という会を結成し、いなり寿司のブランド化に取り組んでいる。いなり寿司のほか、それぞれの地域での五平餅があるので、そういう物産展なども良いと思う。

新城市商工会会長

新城市には、新東名のインターチェンジやパーキングエリアができ、また三遠南信自動車道のインターチェンジもできるということで飯田、奥三河の窓口となる。

その中で、かつて交易の拠点として栄えた「山湊馬浪」としての新城を復活させるため、軽トラックを使った市を毎月開催したいと考えている。60、70台の軽トラックを道路の真ん中に停めて、この地域の物産を売るといったものである。是非参加していただきたい。

また、クラシックカーラリーの全国大会を開催する。富士スピードウェイや鈴鹿では2,000

人か3,000人の来場者であるが、昨年新城ラリーの全国大会では、1万8,000人の方に来ていただいた。新城をラリーのメッカにしたいと思っている。

コーディネーター

これまでのご発言を受けて、アドバイザーの羽場様にご意見をいただきたい。

アドバイザー

4つの視点にまとめてみたい。

1つ目は、住民と行政の役割分担である。風土というものは、いずれのお話からも住民が主体であると感じたが、住民の作り出した風土を育て、保護し、育成するという行政の役割も大きい。住民と行政が連携するがポイントである。

2つ目は、「積極的に交流すること」と「本来の風土を守ること」という2つの意見についてである。交流という点では、旧清内路村でオリンピックのときに花火を披露したが、それは江戸時代に豊川、新居からもたらされたものである。風土を守るという点では、ヨーロッパのエコミュージアムでは現地において守ることが重要とされている。積極的に交流するか、風土を守るかは、それぞれの文化により判断が様々であり、両者はともに大切な意見である。

3つ目は、後継者確保と限界集落、消滅集落の問題である。葬式や祭りができるかは、その地域が元気であるかのバロメーターであり、行政、経済の仕組みと合わせて解決しなければならない問題である。学生を祭りに招き入れる取り組みや、「週末清内路人」という地域外の人に参加してもらい取り組みは参考になる。交流によって祭りを守る取り組みが生まれると良い。

最後に、風土と経済の関係である。そもそもお祭りは経済的効果を期待すべきものではない。フランスでは、お金目立てにエコミュージアムを行った結果、成功しなかった。まずこの地域の風土を残していくという発想が第一にあるべきである。

■ 重点プロジェクトの実現に向けての意見交換

コーディネーター

後半は、風土の重点のプロジェクトをいかに進めるかについて意見をいただきたい。

三遠地方民俗と歴史研究会副会長

伊那街道や別所街道をかつて行き交った信州でいう中馬、三河でいう馬塚ぎの違いを示し、与良木峠の昔の伊那街道を利用した取り組みをするのはどうか。また合併により使わなくなった市役所等の建物をエコミュージアムとして利用すると面白いものができると思うので提案させていただく。

東栄町長

花祭りをユネスコの無形文化遺産リストに登録する取り組みを愛知県としている。東栄町だけでなく、他の地区の花祭りすべてを登録しようと北設楽郡で取り組んでいる。この三遠南信地域には国指定無形文化財が多くあるので、これを祭り街道と連携させるのが良い。霜月祭りも登録の対象になる可能性がある。

新居町長

大型商業施設の進出に危機感を抱いている。新居葬祭は、材料物品をすべて町内の商店から調達するという、全国にほとんど例のない取り組みをしており、テレビ朝日に取り上げられ、来週19日に放映される予定である。

伝統である花火については、月1回の土曜日に作り方を子供たちに教えて技術の承継に努めている。また、NPO を立ち上げ、観光客を無料で案内する取り組みをしているところである。新居町は木曾福島と姉妹都市提携をしており、それぞれの町のイベントでは、互いに相手の町の物産を販売し交流している。オーストラリアのジェラルトンとも同様の取り組みをしている。

大鹿村長

伊那市長谷の団体から始まった秋葉街道を復

活させようという活動により、北は分杭峠から南は地蔵峠まで歩道が改修された。

これもまた伊那市から始まった活動だが、権兵衛峠から国道152号、秋葉街道まで伊那谷を横断する形で日本風景街道の登録をした。次いで大鹿村の中の国道152号も登録した。このような動きが三遠南信でつながっていくと良いと思う。

阿南町長

重点プロジェクト4番目のアンテナショップに関連するが、静岡においては夏場の野菜が不足することから、阿南町の夏野菜をしずてつストア、遠鉄ストアといった静岡県内のスーパーで販売する取り組みをしている。

また、ここにいらっしゃる松田先生の提案を受け、浜松で多く生産されているほおづきを長野県南部地域で栽培する取り組みが始まっている。

新城市商工会会長

重点プロジェクト2番目の鉄道の有効活用に関してだが、飯田線は、天竜峡、伊那に至るまで素晴らしい景色があるにもかかわらず利用者が少ない。観光資源としては最高でありどうか活用すべきである。

また、外国人観光客の誘致に関しては、鳳来、奥三河に訪れた外国人は、川の水がきれいだと非常に喜んでいただいている。

コーディネーター

ここでアドバイザーの羽場様にコメントをいただきたい。

アドバイザー

飯田市も台湾、中国など海外への情報発信に挑戦しているので報告したい。

この地域には、素晴らしい人々、自然、文化があるがそれだけでは人は来てくれない。楽しく交流してお金も落とさせていただくよう、統一したイメージをうまく作り出し、地域資源を日本中、世界中の人に知っていただくことが大切

である。皆様が努力されていることを確認させていただいた。

コーディネーター

取りまとめをしてまいりたい。

前半は、住民と行政が連携し、それぞれの力が効果的に発揮されることが大切であるとの指摘をいただいた。積極的な連携で課題を乗り越えることができる一方で、その風土の本来の姿を守ることも重要であることを踏まえながら、文化を継承していくことが重要である。資金調達では厳しい面があり工夫をしなければならない。

後半は、重点プロジェクトについてすでに具体的に取り組んでいるという意見を皆様からいただいたように思う。伊那街道や秋葉街道を肉付けすることで魅力あるものにする。花祭りの世界遺産登録は、海外への観光情報発信につながる。

アンテナショップについては、それぞれの町ができるところから取り組んでおり、より全体的な取り組みに広げることができるというお話をいただいた。

この地域は、世界的にもすばらしい地域資源があることを認識し、自信をもって取り組んでいきたい。

それではこれで終わりとさせていただく。どうもご協力ありがとうございました。

7 「山・住」合同分科会 要旨

San-En-Nanshin Summit 2009 in Higashimikawa

「山・住」合同分科会では「広域連携による生活環境の向上と流域定住の促進」をテーマに、議論が進められた。

定住自立圏構想についての報告では、南信州の取り組みのほか、三遠南信地域におけるより高度な定住自立圏の可能性にも触れられた。

重点プロジェクトの実現に向けての意見交換では、広報、新聞等による情報交流や地域間の仲介といった交流連携の促進、広域的な総合定住政策の必要性、上流域と下流域における役割分担といったSENAの役割について意見が出された。

コーディネーター	社団法人東三河地域研究センター	常務理事	戸田 敏行
アドバイザー	静岡文化芸術大学	副学長・教授	上野 征洋
行政	袋井市	副市長	池野 良一
	設楽町	副町長	原田 理
	飯田市	市長	牧野 光朗
	平谷村	村長	小池 正充
	根羽村	村長	小木曾 亮式
	下條村	村長	伊藤 喜平
	泰阜村	村長	松島 貞治
	豊丘村	村長	吉川 達郎
経済	浜松商工会議所	会頭	御室 健一郎
	津具商工会	会長	伊藤 武
	鳳来商工会	会長	片桐 幸信
住民	鞍掛山麓千枚田保存会	副会長	小山 舜二
	天龍村柚餅子生産者組合	組合長	関 京子

(敬称略)

■ 第16回の三遠南信サミット2009 in 遠州における「山・住」合同分科会の議論について



コーディネーター

まず、第16回の三遠南信サミットの「山・住」分科会における議論について確認させていただき、そこから始めていきたいと思う。事務局に説明をお願いします。

事務局

昨年の分科会の内容であるが、1つ目は、中山間地域の活性化である。交流促進から定住へという考え方、地域産品の充実、地域で活躍する人づくりが大切であるというものである。

2つ目、天竜川、豊川等の河川を軸に、流域の交流を促進させて定住促進を目指すことが上流域、下流域相互のメリットになるというものである。

3つ目、医療、公共施設、防災体制の強化を、県境を越えて行っていくというものである。これについては、意見は少なかったが、現在の交流をテコにして、将来展望として、医療や防災の連携にも目を向けていきたいというものである。

コーディネーター

去年と今年とでは、SENAという推進機構が立ち上がったということが大きな変化である。SENAをベースに次の段階に進みたい。

「山」の部分では、上下流域の自治体が連携する流域定住の推進体制をどのように構築するのか、「住」の部分では、医療あるいは防災、公共施設利用に関する連携を、実現可能なところで一歩進めるほか、基調講演にあったように、制度変革の必要性を全国に向け発信することを、論点として出していければと思う。

それでは、まず、飯田市の牧野市長から、「定住自立圏構想による地域活性化」についてご報告いただきたい。

■ 定住自立圏構想による地域活性化について

飯田市長



「定住自立圏構想による地域活性化」ということで、私どもの地域の取り組みを紹介させて

いただく。南信州地域は、伊那谷の南部の南アルプスと中央アルプスに囲まれた地域である。飯田市で10万6,000人、南信州圏域全体で17万人余り、高齢化率は28、29%という状況である。人口減少、少子高齢化という大きな波を受けている典型的な地域ではないかと思う。この地域の85%以上が山林で、中山間地域を主体とした地域だといえる。

中山間地域では、独自の時間を刻みながら農業を営み、霜月祭りのような伝統文化芸能を守っている。日本の原点といわれる文化を維持することなく、地域が廃れてしまっても良いのかと思う。こうした地域をいかに持続可能にしていくのが非常に大切である。

今日は、持続可能な地域づくりという観点から、環境と人という2つの視点を提示したい。

まず環境については、日本全体でも2050年で80%のCO₂削減という大きな目標が提示されたが、こうした環境の視点は、地域においても欠かせないものである。飯田市は平成8年の第4次基本構想基本計画において、目指すべき都市像として環境文化都市を掲げており、平成19年には環境文化都市宣言を行い、そして、平成20年には環境モデル都市に応募して、今年1月に認証された。環境モデル都市は、全国13地域で、中部地域では、富山市や豊田市と並び、そして人口10万の都市では飯田市のみである。環境モデル都市飯田市の考え方は、個人のライフスタイルを低炭素化することを軸とし、これに基づき地域づくりを進めるというものである。中心市街地では、自転車によるまちづくり、エコハウスの建設などを計画し、着手している。全体でタウンエコエネルギーシステムを構築して、2050年には温室効果ガス70%削減を目指している。

中山間地域との関係では、飯田市だけでなく南信州地域全体で農村をステージにしたエコツーリズム、グリーンツーリズムに取り組んでおり、全国的にも注目されている。現在では年間110校がこの地域を訪れ、約500戸の農家が受け入れをしている。直接的な経済効果は3億

4,000万円であり、大きな産業の1つに育ってきている。

その中心を担っているのが南信州観光公社である。飯田下伊那の市町村のほか、地元産業経済団体等々の出資を得て平成13年に設立されたものである。

自然豊かな田舎が潜在的に持つ「学びの力」、地域で子供を育てる力、これを地育力と言っているが、こうした力をもっとつけていこうという流れになっている。また、単なる旅行を通しての交流から定住に結びつけていけないかと考えている。

もう一つは、人に着目した取り組みである。人口減少、少子高齢化ということを考えると、2050年にCO₂70%削減という超長期的な地域の目標を達成するためには、地域の将来を担う人材を確保することが大きな課題となる。

こうした観点から、飯田市では、平成19年から第5次基本構想基本計画において目指すべき都市像として文化経済自立都市を掲げた。特に、高校卒業後約8割の人がこの地域を一旦離れるといった現状があるため、若い人たちがこの地域に帰って来られるような産業づくり、人づくり、地域づくりを一体的に行うことによって、長期的な人材のサイクルを構築する必要がある。

そうした考え方を、飯田市のみならず、周りの町村の皆様とも一緒になってできないかと考えたのが、この定住自立圏である。私ども南信州地域では、10年前から、広域連合においてプラットフォームを形成し、必ず1ヵ月に1度は市町村長が集まって、地域の課題について話し合いをしてきた。

飯田市立病院を中心とする地域全体での地域医療体制という考え方、地場産業センターを中心とする地域産業全体の活性化及び雇用の拡大という考え方、地域全体による地域公共交通システムの維持という考え方、こうした考え方を定住自立圏構想という国の制度に上手くのせることができ、全国に先駆け、今年6月の市町村議会において議決していただき、7月14日には、1市3町10村で定住自立圏構想形成協定を結ぶこ

とができた。

こうした地域課題の広域的解決という試みは、私は、南信州だけではなくて、それをさらに広げて、三遠南信地域に拡大することで、さらに大きな課題にも対応できるのではないかと思っている。実際、定住自立圏制度の考え方は、こうした生活圏を中心とした基礎的な定住自立圏と、もう少し大きな単位を中心とした高度な定住自立圏という考え方がある。これは、明らかに三遠南信圏域を意識したようなものだと私は思っている。

大都市圏と地方圏においては、人材のサイクルを構築し、各地方圏における人材確保を目指す。地方圏の中では、定住自立圏の形成協定を締結することで圏域内の人口の確保を図る。

そして、もう一つ忘れていけないのは、飯田市は合併により大きくなった市ということである。飯田市には、山も、里も、町もあり、それぞれの特徴を活かした市域づくりが必要だと考えている。特に今、山の地域及び町の地域から里の地域に人口が移動している。山における過疎化、町における空洞化の進行に歯止めをかける対策を、それぞれの地域で行う必要がある。

特に今日のテーマである中山間地域については、飯田市は、中山間地域振興計画を今年の3月までにまとめ、地域の人口の減少に歯止めをかけていきたい。具体的な取り組みとして進めているのが、中山間地域の地域振興住宅整備事業である。

人材のサイクルにより地域に人が帰ってきて、里に住んで山が過疎化しないよう、山に定住する仕組みが必要であり、過疎化により空室となった公営住宅や教員住宅を地域振興住宅として定義し直し、若い人たちが住めるような仕組みを考えた。山には、アパートのような民間の存在がなく、それをこういった地域振興住宅で補うというものである。こうした多様性の保持というのは非常に重要で、町も、山も、里も、それぞれ魅力をもう一度取り戻すためには、行政だけでなく地域の皆様、企業の方といった多様な主体による持続可能性の追求というものが

求められるのではないかと考えている。

最後に、産業という観点から中山間地域も考えていく必要があると思う。例として、環境モデル都市と指定された飯田市では、地元企業18社が参加し、安価なLED防犯灯の開発に成功した。当時、5万円から7万円といわれた防犯灯が、この地域で、2万円以下で生産できるようになった。これにより、飯田市においては、約6,000基である防犯灯の半分をLED化する目途が立った。こうした競争力のあるものを、是非他の地域でも使っていただき、環境に優しい地域を目指してもらえればということをお知らせしていただき、私からの報告とさせていただきます。

■ 上下流域連携による流域定住の推進体制の整備について

コーディネーター

それでは、議論に入ってまいりたい。最初に、上下流域が連携した流域定住の推進体制整備について、南信州のような取り組みを広げられるかどうか、まず、生活者の視点からご意見をいただきたい。

鞍掛山麓千枚田保存会副会長

私は、平成3年から四谷の千枚田を文化的要素として何とか残そうと活動している。現在、年間1万4,000人の人が訪れている。問題は、人を迎えるために田んぼの草刈の回数を増やし手間をかけて風景を守っているが、特に売るものがなく、お金を落としてもらえない仕組みがないことである。農業生産の場とするのか、観光地化すべきなのか悩んでいる。現在千枚田の保存会を結成し、行政の支援を受けている。若い人たちが23名で村づくりのための「お助け隊」を結成し、これが若い人の流出を止める効果を果たしている。

天龍村柚餅子生産者組合組合長

私たちの住む坂部地区は、人口が30人、15戸となってしまった限界集落である。その中で、年60回余り、食文化に関するお祭りを行い、そ

れを残そうとしている。お祭りには浜松や豊橋の方も来ていただいている。また、愛知大学や信州大学の方々が柚餅子づくりに来ていただいている。受け入れ側の高齢化や宿泊施設の整備が課題であるが、地域で収穫したものをお出しして、是非幸せを感じてお帰りいただきたいという思いでやらせていただいている。

コーディネーター

次に、自治体の皆様から、定住についての戦略をご発表いただきたい。

下條村村長

私は平成4年に今の職に立候補したが、そのときの公約は、人の増える村にしようというものだった。財源確保のため、行政のぬるま湯体質を徹底して改善した。また、そういった姿勢を示すことで、村民の皆様にも自分でできることは自分でやってもらうようにした。街づくりの意識も変わってきた。図書館、福祉施設、文化ホールの建設のほか、住宅施策にも取り組んでおり、若者にも入ってきていただいている。補助金に頼らず全て村負担で住宅建設を行うことで、村が独自に入居者の条件を決めている。これが円滑なコミュニティづくりやひいては定住につながると考えている。

下條村は、天竜川流域にある。基調講演で川を輸送手段に使うという話があったが、急流で断崖絶壁が多いため困難だと思われる。三遠南信自動車道の天竜峡インターチェンジができたことにより名古屋の企業の60人規模の工場が進出したので、広域の中で優秀な労働力を提供していただき強い企業になってもらえればと思っている。公共交通機関はほとんどなく、「乗って残そう飯田線」というキャンペーンを行っている。

根羽村村長

根羽村は、長野県の一番南で岐阜県と愛知県に接し、矢作川の上流にある。古くから林業が盛んで、1戸当たり5.5ヘクタールの山を持って

いる。60%が村有林である。

大正3年に、愛知県の下流域の明治用水土地改良区、安城市の方たちが、「水を使う者は、自ら水をつくれ」という理念から、一番上流であるの根羽村の1,427ヘクタールの水源涵養林を買ったことをきっかけに、100年近く交流が続いている。現在では特にアイシングループの皆様と、年に4回、親子わんぱく体験隊、夏のアユのつかみどり、間伐の体験など、体験学習及び環境学習を行っている。

根羽村は、人口減少しているが、住宅を整備し、森林組合等の職場を確保することで、下流域や関東、関西方面から130人ほどのIターンの方に来ていただいた。村に入らせていただく際には面接を受けてもらい、消防団や祭への参加をお願いしている。Iターンの方のための専用の宅地を造成したり、根羽杉で家を建てる場合は柱を50本無料で提供したり、結婚相談員を設けるなどの施策に取り組み、定住推進を図っている。

浜松商工会議所会頭

我々下流域の者が、上流域の方々に貢献できることとして、コンピュータのソフト関連企業等の工場の進出ということが考えられるが、現在非常に厳しい状況である。低炭素社会との関係では、下流域の資本力のある企業が中流域あるいは上流域の山林を取得するということが考えられるが、これも実行に移すのは難しい。三遠南信自動車道が開通すれば、交流人口を増やすことができ、また上流域に定住することも可能になる。

個人的な話で恐縮だが、佐久間ダムの近くに私の実家があり、また山林を持っているが放置林となっていた。その手入れを森林組合に依頼したところ、竹炭作りや、間伐をしてどんぐりを植えるといった提案があった。経済林としては採算が合わないため、地元の人に楽しんでもらうような連携も良いと思う。また、自然を活かし林間学校を開きたいとも思っている。

浜松市は、市域1,500平方キロメートルのうち

の76%が山林である。天竜林業地域は約10万ヘクタールほどあり、大半が放置林となっている。水源林としての活用や森林組合の活性化など総合的な戦略の構築が必要だと思う。

袋井市副市長

下流域の自治体として発言させていただく。袋井市は天竜川左岸、磐田市の隣に位置し、人口は8万7,000人、面積は108平方キロメートルである。高齢化率は県下でも低い18.12%、人口は年々微増している。区画整理、企業誘致、雇用の場の確保、地震対策、防犯対策、子育て支援及び自治会の関係に力を入れている。農業は、米、お茶及びマスクメロンが盛んである。後ほど機会があれば飯田市長に木質ペレットの話をお願いしたい。この分科会に参加し、下流域の自治体に期待するものを皆様からお伺いしたいと思っている。

コーディネーター

ここでアドバイザーの上野先生に、上下流域が連携する定住促進についてお話をいただきたい。

アドバイザー

まず、上流域、下流域の交流に関して、三遠南信サミットも随分回を重ねてきたが、上流域の町と下流域の町の情報が相互に伝達していないのではないかと疑問を持った。UターンやIターンを希望する人、あるいは農業を希望する人が、都市部では情報を得にくいのではないかなと思う。よって、まずは、それぞれの自治体の広報やケーブルテレビを利用して活発に上流域下流域相互の情報交流をすべきでないかなと思う。

次に定住促進であるが、それぞれの町や村の人が自らまちづくりをすることで町や村の魅力が生まれると思う。飯田市の牧野市長を始め、ここにいらっしゃる村長さんたちも、都会に出て自分のふるさとへ帰った方が多いと思うので、自らモデルとなってUターン、Iターンを広めてほしい。

■ 広域連携による安全・安心な地域の形成 について

コーディネーター

次に、定住のための安全・安心な地域の形成についてであるが、これは、医療や教育といった非常にシビアな問題があり、それをクリアできないと定住は進まないこととなる。これに関しご発言をいただきたい。

設楽町副町長

設楽町は、愛知県の北東部にあり、長野県、岐阜県の県境と近いところである。人口6,500人弱であり、愛知県で北設楽郡という一番過疎、高齢化の進んだ地域の一つである。

医療の面では、現在は町内に民間の診療所が2カ所、そして無医地区には公立の診療所が1つあるが、しっかりと治療ができる状況ではない。現在、新城市に救急医療を含めた常備消防業務を委託している。道路事情が非常に悪く、救急患者の搬送に時間がかかるという問題がある。新城市市民病院まで約1時間、豊橋市民病院まで約1時間半かかる。そこで本年度、搬送時間の短縮のため、24時間離発着が可能な専用のヘリポートの建設を、2億4,000万円弱の予算で愛知県の財政支援を受けながら進めている。患者の搬送については、愛知県の防災航空隊による24時間のヘリコプターや愛知医科大学の日の出から日没までのドクターヘリと行政との連携が上手くできている。平成20年1月に設楽町のため池でおぼれた3歳児をドクターヘリで静岡県立こども病院に搬送し、幼い命を救ったという事例もある。現在、年間20件ほどヘリコプターによる搬送がある。

平谷村村長

平谷村は、長野県でも人口の一番少ない540人の村である。矢作川の上流で、標高が非常に高く、冬の寒さも非常に厳しいところである。以前は林業が盛んだったが現在は温泉により生計を立てて頑張っている。

豊丘村村長

昨年は、雹により農産物が大きな被害を受けたが、傷害果の加工食品の販売で特に浜松市さんにお世話になった。お礼申し上げる。

豊丘村では、人口減少対策として住宅団地の建設したが、効果が表れていない。医療に関しては、飯田市を基幹病院としているが、松本空港や浜松市のヘリコプターによる搬送も行われている。

津具商工会会長

旧津具村では30年ほど前から、1年の就労体験をすると、役場の補助により家を建てることができ、また、そのための土地も役場で確保してくれる。これにより、10年以上定住している人が20世帯ほどある。今、60軒ぐらいのトマト栽培農家があるが、半分は転入者の方である。トマトだけではなかなか収入がないので、皆様苦勞されている。

鳳来商工会会長

上下流域の交流では、上野さんがおっしゃるように、地域の新聞等で情報交換し合うと良いと思う。そういう情報をもとに足を踏み入れているうちに、定住につながってくると思う。新城市では、特異な例だが、昭和10年代につぶれてしまった集落に、最近になって人が住み着くようになった。私の地域は付き合いが厳しいので、逆に束縛のない環境の方が、定住してもらえるのではないかと思う。

■ SENAへの期待について

コーディネーター

それでは、牧野市長にご意見をいただいて、最後に、SENAへの期待を一言ずつお出しいただきたい。

飯田市長

上下流域の皆様からのお話をお聞きして、私を感じたところを申し上げます、定住自立圏は、

中心市と周りの町村との役割分担の明確化により、圏域全体の持続可能性を追求していくものだと思う。三遠南信圏域にこの圏域を広げて考えても同じだろうと思う。

その意味では、上流域、下流域それぞれの役割が何かということをも S E N A にきっちり調査してもらいたい。人口動態や産業関係のデータを共有化することも大切だと感じている。また、定住においては安心安全の確保が重要であるが、役割分担の観点から飯田市、豊橋市、浜松市といった中核的な都市がその圏域での役割を果たすことが必要である。私どもについては、この地域全体の安全安心のために市立病院を守っていくことが重要である。特に市立病院の産科医師の確保に取り組んでおり、これにより特殊出生率が1.7と伸びており、上流域でも、役割分担によって子供を増やすことができると考えている。

袋井市副市長

S E N A に対しては、ただいまのお話の中の上流域と下流域の役割分担と、道の整備促進を是非精力的にお願いしたい。

設楽町副町長

人やものや情報などのいろいろな交流をもっと活発にさせていただき仕掛けを期待している。

平谷村村長

上流域、下流域、それぞれできることがあると思うので、一生懸命頑張り、手をつなぐことが大事だと思っている。

根羽村村長

一昨年、飯田市での三遠南信サミットで、浜松の鈴木市長と浜松商工会議所の中山会頭のお二人に、「四季折々自然を求めにもっと交流に来てください」と話したら、今年の村のフォトコンテストには浜松の人が非常に多く入賞した。そしてまた、平谷村、売木村には温泉バスを毎週出させていただき、根羽村ではネバーランドで商

品を買っていただくという交流が続いている。

下條村村長

南信州地域には151号と153号があり、下條村にも151号が通っているが、地形的原因もあって特に151号は整備状況が悪く、交流は豊橋より名古屋に向かっていく。道路の整備を強くお願いしたい。

豊丘村村長

三遠南信自動車道の開通を願っている。

浜松商工会議所会頭

先ほど飯田市の牧野市長がおっしゃったように、役割の明確化をすることが重要で、この戦略をしっかり立てることを S E N A に期待をしたい。

津具商工会会長

道路が一番大事である。私どもの地域では、豊橋や浜松へ行こうと思っても、500メートルぐらい乗用車のすれ違いができないところがある。是非とも道路網の整備をしてもらいたい。

鳳来商工会会長

この圏内で、自分たちの必要とする情報をいつでも取れるようにしていただきたい。

鞍掛山麓千枚田保存会副会長

情報発信としましては、これまで75カ月間、「千枚田だより」を発行している。こういうことを S E N A で取り上げていただき、情報を一元化していただけると良いと思う。

天龍村柚餅子生産者組合組合長

私どもも何とかこの地域を地図の上からなくしたくないという思いでやっている。

情報不足に関しては、三遠南信の情報誌で「Am i」というすばらしい情報誌がある。是非読んでいただき、育てていただいて、いろいろなイベントも S E N A と一緒にやっていただ

けたらうれしい。

飯田市長

木質ペレットについてであるが、袋井市の農家では岡山のペレットを使用しているので、それを圏域内で入手できないかというお話である。ご相談に乗れますよという話を今ここでしていたところである。私は、そういうSENAのマッチング機能というものを強めてもらいたいということをつけ加えさせていただく。

コーディネーター

最後にアドバイザーの上野先生にお願いしたい。

アドバイザー

皆様からは、大変前向きなご提案やご意見があったので、良かったと思っている。最後に3点ほど申し上げる。

1つは、定住促進や人づくりをするに当たっては、人には、経験、情報、ネットワーク等、様々なものが付随するため、町や村として必要な人材に呼びかけをし、情報発信することが大切である。

もう一方で、町や村の中の空いているスペースに芸術家やデザイナーが住み着き新しい創作活動を行い、時々町へ戻るといような実際の例もたくさんあるので、そういった人たちに呼びかけるという方法がありうると思う。

2点目は、連携する上で相手にとってのメリットと自分にとってのメリットがはっきりわかるような形での連携が大事だと思う。

3点目は、SENAへの注文になるが、SENAに、情報を集めそれをまた各地に戻すような、情報センター的な役割をしてもらいたい。是非ご検討いただきたい。

コーディネーター

結論としては、行動するSENAへの期待ということで、次年度、そういう動きが報告できればと思う。1年の間に議論を集約して、来年度

のサミットに臨めるようにというのを私からの注文にさせていただきたい。それでは、皆様、長時間どうもありがとうございました。

8 三遠南信地域住民セッション

San-En-Nanshin Summit 2009 in Higashimikawa

全体会に先立ち、三遠南信地域の住民並びに住民団体及び特定非営利活動法人が集い、三遠南信地域住民セッションが開催された。ここでは、住民団体等のプラットフォームとなる「三遠南信市民連絡会」の形成に係る議論と、地域連携ビジョンの政策の基本方針に基づく4つのテーマごとの意見交換がなされた。

市民団体連携委員会委員長 原田様



第17回三遠南信サミットの住民セッションを始める。

今回は、2つ議題を用意している。1つ目は、市民団体の結集の軸として、プラットフォームの形成について議論いただき何らかの合意を得たいということである。2つ目はテーマ別意見交換会として「道」「技」「風土」「山・住」の各テーマについて意見交換を行うということである。

■ プラットフォームの形成について

市民団体連携委員会委員長 原田様

最初にプラットフォーム形成についてである。今回の住民セッションの呼びかけは市民団体連携委員会が行った。このような組織を参考にして遠州、南信州からも集まり連携し、三遠南信地域全体を網羅できる組織にしていきたい。

4、5年前になるが、このサミットの大きな軸として「行政」「経済」の2つの大きな軸に加えて「市民」の軸も必要ではないかという意見が出された。そのときに提唱されたものが、このプラットフォームである。しかし、その後なかなか進展していない。これまでの経緯について

三宅さんにまとめてもらった。三宅さんにポイントを説明していただきたい。

三遠南信アミ 三宅様

プラットフォームとは三遠南信地域の緩やかな集まりを表す。第14回(2006年)から取り組んだが、進展していない。事務局機能が不可欠だが、それは負担が大きく、担う組織がないことが課題である。



市民団体連携委員会委員長 原田様

新たなプラットフォームとして、三遠南信市民連絡会を作ることになった。しかし、具体的な動きはなく現在に至っている。年1回の集まりでは、なかなか意見が出ない。サミット以外の集まりで、気軽に意見交換して仲良くならなければ、皆のパワーをまとめることはできない。

三遠南信地域を学ぶ会 吉田様

ひとつの目的を持った組織としては、既に出来上がっているのではないかと。SENAや愛知大学の三遠南信連携センターも応援してくれている。今回も3地域の代表が集まっているが、まさにこれがプラットフォームであると思う。それぞれの地域で、仲間に呼びかけていく際に、

必要な情報を取り扱う組織としてプラットフォームがある。

合唱劇「カネト」をうたう合唱団普及委員長 清水様

20年ほど前からこの地域に目を向けており、山と海を結ぶ必要性を感じている。先日、佐久間へ行ったときに、たまたま「中央構造線を見る会」のツアーバスを見た。こうした情報を一元化し、プラットフォームで情報を共有していければ良いと思う。

田峯城縁者会 今泉様

これまでに何回か出席して、この会の必要性を感じている。このプラットフォームの傘下には芸能・歴史・産業などいろいろな分野の組織を置くことが必要である。そして、集まった情報を参加できなかった多くの団体に提供するためにも、プラットフォームの立ち上げは必要である。

三遠南信アミ 水島様

三遠南信サミットに合わせて住民セッションを行っているが、毎年1回だけでは寂しい。是非ともプラットフォームを形にしたい。山・住のグループには、都市と山里の交流を活発にやっている方に集まっていたらいいが、まさにこれがプラットフォームの形であり、三遠南信地域の交流の架け橋になると思う。

三遠南信アミ 三宅様

2つの具体的な提案をさせていただきたい。市民レベルで、4つのテーマに沿ったグリーンツーリズムを企画してみてもどうか。そのツアーに私達が参加費を払って参加してはどうか。また、体験に参加する住民団体の、バス代が半額になる「三遠南信地域のツーリズムパス」の仕組みをつくってみてもどうか。

市民団体連携委員会委員長 原田様

何らかの形で進めていこうとの意見は続々と

出ているが、事務局機能と運営資金が大変大きな課題である。この大きな課題を乗り越えるために、まだ具体的な取り組みはないが、SENAの力も借りて、次回のサミットが開催されるまでに何らかの行動を起こしたい。

■ テーマ別意見交換 中間発表

道：三遠南信地域を学ぶ会 河合様

飯田線の三河川合から天竜峡まではかつては鉄道が通っていなかった。67キロメートルの鉄道をカネトが作り、飯田から豊橋までつながって皆喜んだが、かえってそれで中山間地域が疲弊しだした。

今遠山郷にお住まいの方が、地域づくり、環境づくりについてもっと泥臭い意見交換をしたいとおっしゃっていた。

道を作って、疲弊する地域を作るのではなく、その道から一歩出て、交流をしたい、地域を楽しんでもらいたいという意見があった。

技：特定非営利活動法人佐奈川の会会長 近藤様

阿南町でトマトを作っている池田さんのお話を伺っている。

風土：三遠地方民族と歴史研究会 仲井様

重点プロジェクトにある塩の道、秋葉街道をうまくPRしていくのが良い。また、奥三河は伝統芸能の宝庫で、花祭り、はねこみ、ほうか、さんぞろ祭りなどがあり、PRしていくことが大切である。塩の道についても、新城の奥に昔の伊那街道がそのまま残っており、イベントをしたらどうかという意見も出ている。南信州では限界集落が多く、NPOが空き家の田畑を代わりに耕しているという状況である。自分たちだけでは限界があるため街の人たちにPRする良い方法がないかと検討している。

山・住：三遠南信アミ 水島様

プラットフォームづくりという大きなテーマがあるが、それは目的ではなく、三遠南信地域

の素晴らしさを伝え、課題を解決するための手段である。住み続けるということと都市部との交流がテーマである。地域資源を活かして交流が始まっており、各地の特徴を知って、地域資源をきちんと情報発信することが大切である。



■ テーマ別意見交換 まとめ

道：三遠南信地域を学ぶ会 河合様

行政のお金をあてにすることなく、そこで生きるために活動をする。そのため雇用や生活の場の確保が大切である。道ができた場合、中山間地域の素敵な場所を体験してもらおうという企画を作ることが大切である。リタイアした老夫婦と一緒に歩く熊野古道のような活動をこの地域で行いたい。

技：三遠南信アミ 三宅様

私たちの暮らし、命を支える原点である農業の技を取り上げた。今日は、阿南町でトマト栽培をしている池田さんのお話を聞いた。原点は土づくりであるが、消費者の需要の多様化に対し、商品開発等に取り組んでいる。池田さんは、惜しみなく技術を提供して行って、浜松や磐田市の肥料会社もその恩恵を受けており、「農業哲学」を教えていただいた。

風土：三遠地方民族と歴史研究会 仲井様

一番問題になったのは、次回サミットが開催される飯田市を中心とした南信州地域で、いかにプラットフォームを進めていくかということである。飯田市の企画部の方や財団法人野外教育

研究財団の方から、南信州は東三河や浜松市と異なり、横の連携ができていないという意見があった。

山・住：三遠南信アミ 水島様

まず、訪ね合うことが大切である。次に、都市と中山間地域をつなげる具体的な交流企画の情報交換、必要に応じての情報発信が大切である。

プラットフォームの機能、役割については、交流の企画やイベントにおいて、地域間、団体間の連携やコーディネートが必要になる。Iターン・Uターンを推進するに当たっては、どのように生活をしていくか、収入を得るかということが大切になる。

市民団体連携委員会委員長 原田様

限界集落という言葉が使われている中で、今あるものを維持していくことが大切である。皆さんの発表の共通点は「お互いを知る」ということであった。都市部にいる人に中山間地域の状況を知らせるために情報発信していく。

今日の住民セッションでは2つの話があった。前半のほうでは、今後プラットフォームという形で次回のサミットまでに事業を行う。そのために三遠南信市民連絡会という組織について充実した事務局体制を作っていく必要がある。そこには運営資金も必要である。現在抱えている問題を SENAさんと協力していくことで何らかの道を切り開いていくという確認をいただいた。テーマ別では大事な問題をいろいろと出していたいただいた。これを午後の分科会の発表につなげていただければと思う。以上で住民セッション終了とさせていただきます。ありがとうございました。

報告会では、各分科会のコーディネーターがそれぞれ議論された内容を報告し、豊橋市長がサミット宣言を行った。また、飯田市長が、次回開催地域を代表してあいさつをした。

■ 「道」分科会

コーディネーター 豊橋市長 佐原光一

「道」分科会では、まず、飯田市から三遠南信自動車道の整備状況と効果について報告をいただくとともに、三遠南信自動車道や浜松三ヶ日・豊橋道路の建設促進について、行政、経済界、議会それぞれが組織する期成同盟会や協議会の活動状況の報告をいただいた。その後、三遠南信ビジョンに掲げる重点プロジェクトの実現に向けて、前回サミットの議論を踏まえ、地域基盤の活用により、地域交流やまちづくりにどのような効果を期待するか、また、その実現に向けて、三遠南信地域が一体となってどのような活動を行っていくべきかなどについて議論を進めた。



まず、三遠南信自動車道や浜松三ヶ日・豊橋道路については、この地域の基幹道路として多くの参加者から様々な意見をいただいた。その中で、道路整備は、点から線につながってこそ道としての機能を発揮するものであり、国直轄となっていない現道活用区間についても、どうあるべきか考えるべきだとの意見があった。また、三遠南信自動車道は、飯田から伊勢までつながって、この地域の骨格を形成するものであり、また、三遠南信の西に位置する蒲郡から浜松につながる名豊道路も、三河港などを活用した物流や人の交流を促し、地域の活性化につながるものとして重要であるといった意見が出された。

次に、リニア中央新幹線の早期建設と飯田駅の設置については、三遠南信道路の実現とともに開業を目指していきたいが、政権交代による国の社会資本整備の方針の変化や財政難など、一段と厳しさを増している状況下にあるため、重点プロジェクトの実現に向けては、今後、国や国会議員に理解してもらうため、現場を見てもらう機会を設けるべきだとの意見があった。また、政策提言していくためにも農業、工業など、この地域の高いポテンシャルを具体的なデータなどで示すとともに、地域、そして住民の元気な姿をアピールすべきであるといった意見が出された。

また、生活道路がきちんと残されていくためにも幹線道路の整備が重要で、地域において頑張っている人たちの声も大きな力になるとの意見があった。

総括として、アドバイザーの大貝教授からは、これらの意見を踏まえ、中山間地域の日常サービス施設までの車でのアクセス時間などを調査しており、こうした点で、この地域に側面から協力していきたいとアドバイスをいただいた。

■ 「技」分科会

コーディネーター 愛知大学三遠南信地域連携センター長 岩崎正弥 様



「技」の分科会では、4つの重点プロジェクトに重心を置いて議論を進めた。この1年間に、このプロジェクトがどのように動いたかということに参加者の方々から報告をいただいた。そして、今後の取り組みについて活発な議論がなされた。ここでは5点にまとめて報告をさせていただく。

まず、第1点目、地域資源を発掘、活用していくことが大切である。産学官連携が進まない現状があるが、その場合にはコーディネーターを入れることが重要

であるという意見が出された。

第2点目、情報交換の必要性、重要性である。異業種交流をすることで、新たなイノベーションを期待する。これを今後とも促進をしていかなければいけないという意見である。

第3点目、情報発信の重要性である。三遠南信地域は、一步この地域の外に出るとほとんど知られていない状況である。よって、三遠南信地域の見せ方を今後工夫していく必要があり、わかりやすいキャッチコピーを作る必要がある。ものづくりではこの地域は非常に有名であるが、それを物語るキャッチコピーをつくり、全国あるいは海外に向けて発信していくというものである。

第4点目、農商工連携、産学官連携に関して、既にこの地域には国から補助を受けた形の拠点が出来上がっている。これをこの地域全体に広げていく必要性があるというものである。

最後、第5点目、地域連携ではなくて三遠南信地域の融合ということに向けて、今後さらなる発展を願っていくことが必要ではないかということを確認した。

■ 「風土」分科会

コーディネーター 市民団体連携委員会委員長 原田敏之 様

前半は、この三遠南信というエリアを考えた上での連携の事業というものをどう展開していくのか、後半は、重点プロジェクトにどのように取り組んでいくべきかについて議論した。

前半の連携事業であるが、まず、祭り街道という事業を事例に議論を発展させた。その中では、住民の力と行政の力をどのように組み合わせ、また役割分担をし、バランスを図っていくのが大変重要であると改めて確認をした。特に問題になったのは、「限界集落」

という言葉が出る状況の中、地域の伝統芸能等を次の世代にどのように継承していくかということである。連携や様々な交流を通じて、この課題を何とか克服していく道があるのではないかと話を進めさせていただいた。その中で、ふるさと歌舞伎交流事業などを通じて、他の地域の人たちからパワーをもらい、これは大事な機会であるとのご報告をいただいている。

その一方で、その地域の本来の姿というものを忘れてはならないとの意見もあった。信仰にルーツを持つ祭りでは、本来大切にしてきたものを軽々に扱ってはならないのではないかと話した。



大事に掘り下げていくことで、また新しい別の可能性というものも出るのではないかとということであった。いずれにしても、これを継承していくということについて、いろいろな知恵をもっともつと出し合っていくということが必要である。

後半の重点プロジェクトについては、もう既に取り組んでいるものがあるということで、できるところからどんどん進めていくということが可能ではないかということであった。例えば、風景街道づくりについては、伊那街道や秋葉街道など、もっと情報を整理し、可能性をつなげていくことによって、いろいろな物語をもつて膨らませていくことができる。また、鉄道を利用する方法もある。これについては、世界から見たらうらやましがられるような、自信の持てる財産がいっぱいあるのだというご指摘もいただいている。

また、海外への観光情報発信については、例えば、東栄町を中心に、花祭りを世界遺産に登録していこうという動きが具体的に進められている。

三遠南信アンテナショップの開設については、町を挙げてアンテナショップを展開していくという試みをしている事例も既にあるので、これを三遠南信全体の取り組みの中で位置づけて、展開していくことが可能ではないかということである。

したがって、重点プロジェクトについては、優先順位を付けていくという想定であったが、実はできることが身近にたくさんあり、積極的にその具体化をしていくことから道が出てくるのだという形に議論が整理されたかと思う。

■ 「山・住」合同分科会

コーディネーター 社団法人東三河地域研究センター常務理事 戸田敏行 様



「山・住」は2つの課題がある。1点は、上下流域で定住を進めるということ。もう1点は、医療、防災等を含めた安心・安全を確保するということである。

冒頭に飯田市の牧野市長から定住自立圏構想の発表をいただき、三遠南信は高度な、より広い機能を持った定住自立圏を目指すのだというお話をいただいた。それに沿って議論が進められた。

まず、行政、経済界、住民の視点から現状の確認をした。交流が増大しているが定住に結びついていないという現状や、ある地区では、転入する人を選ぶことで、コミュニティ形成に配慮しているが、ある地区では、廃村に自由に転入をさせているとの話があった。

まとめといたしましては、次の3点とさせていただきたい。

1点目は、交流連携の促進である。その1つは、広い三遠南信の中でそれぞれの情報が得られない状況にあることである。これについては、広報紙、ケーブルテレビ、新聞による連携を図る、あるいは、NPOが発行している雑誌「Am i」を広めることが問題解消になるということであった。それから、仲介がある。林間学校の開校、飯田市などのUターンのモデル的人材紹介、上下流域で結婚相手の紹介、袋井市で使用する木質ペレットを飯田市から調達するなどの仲介という交流の促進が1点である。

2点目は、総合定住政策の必要性である。定住を促進していくためには、施策がバラバラではできないため、働く場、企業の活動や県境を越える緊急医療といった各地の機能を決めて、そこから定住を図っていくということである。

3点目は、SENAの役割であるが、1点目、2点目の政策を進めていく。特に、2点目の定住政策を進めていくには、県境を越えてデータを集め政策を立てることが必要である。これはSENAの専権的な要件であり、構想から計画への政策実施機関としての期待が非常に高いということである。県境を越える政策主体はなかなかつくりにくい。しかし、基調講演にもあったように、同様の動きも全国に出てきている。県境を越えた政策を決めることができる、あるいは、補助金を直接的に受けられる、そのような県境を越える政策主体となれることが、SENAから国に要請していくべき提案事項ではないかというのが私の感想である。

以上、現状と3点に取りまとめられたということで、「山・住」合同分科会の報告とさせていただきます。

サミット宣言 豊橋市長 佐原光一

三遠南信地域は、圏域人口 230 万を擁し、「塩の道」を通じた歴史的、文化的な交流や豊かな自然環境を背景として、都道府県に匹敵する経済規模を誇るなど高いポテンシャルを有する地域です。

また、国土軸を形成する新東名高速道路や、太平洋地域と日本海地域を結び圏域の南北交通の基軸となる三遠南信自動車道の整備が進められ、さらには圏域北部の玄関口となるリニア中央新幹線飯田駅の設置が検討されるなど、将来に向けて更なる発展の可能性を秘めています。

こうしたなか、平成 20 年 3 月には、「三遠南信地域連携ビジョン」をサミットでの合意のもと策定し、目指すべき地域像を「三遠南信 250 万流域都市圏」として、各主体が活動の方向性を一致させ、交流から連携への動きを加速させることとし、平成 20 年 11 月には、「三遠南信地域連携ビジョン推進会議（SENA）」を設置し、事務局を開設するなど、圏域の政策調整機能を整備してまいりました。

今回のサミットは、SENAが主催する初めてのサミットであり、「日本の県境連携モデルの構築」というテーマのもと、「道」「技」「風土」「山・住」の各分科会で、活発な意見交換、議論が進められてまいりましたが、こうした結果を踏まえ、私たち三遠南信地域は、次の事項に重点を置き、日本の県境連携を先導するにふさわしい圏域活動を進めてまいります。

- 1 三遠南信 250 万流域都市圏の骨格となる三遠南信自動車道や浜松三ヶ日・豊橋道路の早期整備、三遠伊勢連絡道路構想の実現、さらには新たな東西軸を形成するリニア中央新幹線飯田駅の設置に向けて、「三遠南信地域連携ビジョン推進会議（SENA）」を中心に、地域一丸となって提案活動を進めます。
- 2 新産業の創出と既存産業の活力増進に向けて、知的・産業クラスターの形成など県境を越えた産学官連携による農商工連携や医工連携の取り組みを進めるとともに、県境を越えた大学・研究機関の連携を通じて次代を担う人材の育成を進めます。
- 3 三遠南信地域の地域資源の価値向上のため、塩の道エコミュージアムを構成する歴史・文化的な地域資源や地域の特産品などの情報収集に取り組み、情報発信の機会を創出するとともに、地域資源のネットワーク化やブランド化を進めます。
- 4 広域連携による生活環境の向上を目指して、住民の命を守る医療や防災の連携、美術館や博物館など公共施設の相互利用を進めます。また、中山間地域における定住促進に向けて、都市部との二地域居住など流域定住推進モデルの形成を進めます。

これらの取り組みを、ここに集うすべての主体が確認し、連携から融合に向けて、第 17 回三遠南信サミット 2009 in 東三河のサミット宣言といたします。

平成 21 年 11 月 13 日

三遠南信地域連携ビジョン推進会議
三遠南信サミット 2009 in 東三河

○ 次回開催地域あいさつ

飯田市長 牧野光朗



ただいまご紹介いただきました飯田市長の牧野光朗でございます。

次年度開催地であります南信州地域を代表して、一言ごあいさつを申し上げます。

三遠南信サミット2009 in 東三河が所期の成果を上げて、本当に多くの皆様方のご参加のもと、盛大に開催され、無事閉幕の運びとなりましたこと、まずもってお祝いを申し上げる次第であります。これも佐原豊橋市長さん初め、東三河地域の皆さん方、関係されました皆様方の大変なご尽力によるものと深く感謝を申し上げます。

さて、この地域を取り巻く環境というものは、大変大きく変化をしてきているところであります。先ほども報告がありましたように、本日の議論を振り返ってみますと、この私どもの三遠南信地域におきましては、そうした環境の変化をきちんと踏まえた形で変わっていく、そして自立していく、そういった可能性を持った地域であるということを改めて感じたところであります。来年度はサミット6巡目の区切りとなるわけであり、18回目を迎えるわけであり、この三遠南信地域連携ビジョンの具体化に向けた更なる論議を重ねる場にできればと思っております。そのためには、SENA事務局の機能をさらに強化していく必要も感じた本日でありました。

先ほど、連携から融合に向けてという大変力強いサミット宣言があったわけであり、我々は、それでは何から具体的な融合に向けての動きがで

きるか、これから、本日ただいまから、さらに検討していく必要があると思っております。具体的な検討が必要であります。

例えば、地域政策の融合という観点から見て、どんな政策をこの圏域全体で共有して融合してやっていけるか、地域の医療政策一つとってみましても、例えば、浜松市さんが持っているヘリコプターを圏域全体で使うことは可能なのだろうか、あるいは、この圏域全体で産科制限をしている地域というものを解消していくことが我々の地域全体の経験からできるのだろうか、あるいは、環境政策におきまして、先ほどペレットストーブの話も出ましたが、そうしたペレットの圏域内の流通をもっと広げていくことができるのだろうか、あるいは、私どもの地域で開発しましたLEDの防犯灯であります、こうしたものを環境政策の中に、例えば、圏域全体で取り入れていくことができるのだろうか、そうしたさまざまな具体的な提案というものを一つ一つこれから検討していく時期に入っていると私は思うわけであり、

次期開催地の南信州地域は、今年、構成いたします1市3町11村が一体となりまして、定住自立圏構想を全国に先駆けて取り組んできているところでございます。先ほど、戸田様からも話がありましたが、こうした定住自立圏というものは、さらに、この三遠南信圏域全体に広がってこそ意味があると私は思っております。基本的な生活機能を有するこの定住圏が、それぞれ相補い合いながら高次の定住自立圏を形成していく、日本でそうしたことができるのは、この三遠南信圏域が恐らく一番最初だろうと私は思っているところでございます。

連携から融合に向けて具体的にどんなことができるのか、次回、飯田で開催するまでに検討を重ねていくことができればということをお願いいたしまして、私からのあいさつとさせていただきます。

次回、飯田で是非また議論しましょう。よろしく申し上げます。

10 交流会

San-En-Nanshin Summit 2009 in Higashimikawa

交流会では、農商工連携により開発された商品の試食・試飲や販売のほか、豊橋まつりのダンスコンテストで「ええじゃないか大賞」を受賞した舞花連（まいかれん）の踊りが披露された。



■ 交流会の様子



■ とまテル（田原市）

糖度の高い渥美半島産のカンパリトマトで作ったカクテル



■ 初恋レモン（豊橋市）

豊橋産の完全無農薬レモンを使用したレモンパン



■ 青じそ寄せ豆腐（豊川市）

香り高い豊橋産の青じそがアクセントになった若草色の寄せ豆腐



■ 玄米酒 玄氣（浜松市）

芳醇な玄米の香りとコクが特徴の玄米 100%の玄米酒



■屋台獅子最中（飯田市）
飯田東和会の共同開発商品で獅子頭を模した最中



■ゴマ菓子（駒ヶ根市）
ゴマを使った香ばしい香りのお菓子



■試食・試飲・販売の様子



■舞花連（まいかれん）のダンス



第17回三遠南信サミット 2009 in 東三河
平成21年11月13日開催
三遠南信地域連携ビジョン推進会議 (SENA)
